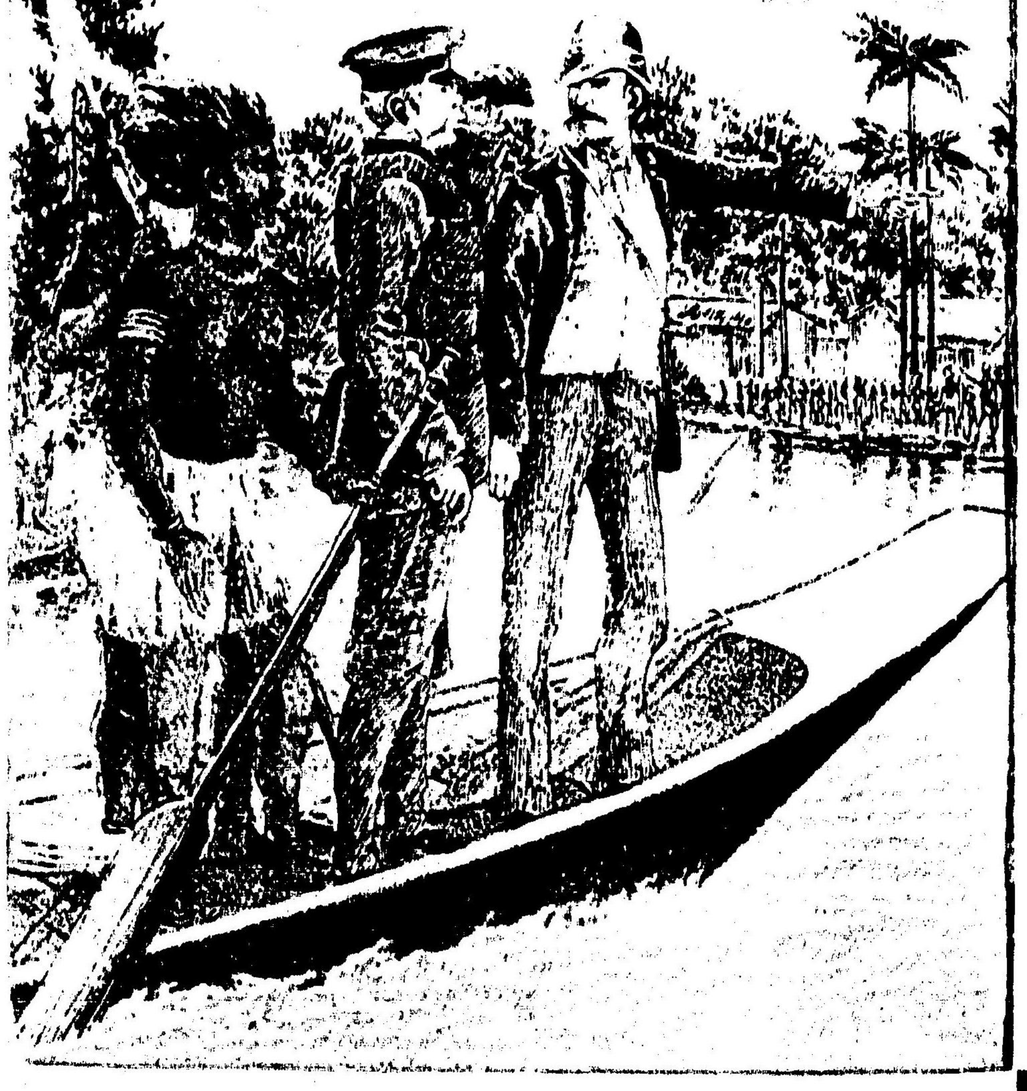
亞非利加内地

探檢實記

千々石

藤田執筆先生纂譯

大阪國書出版會社藏版



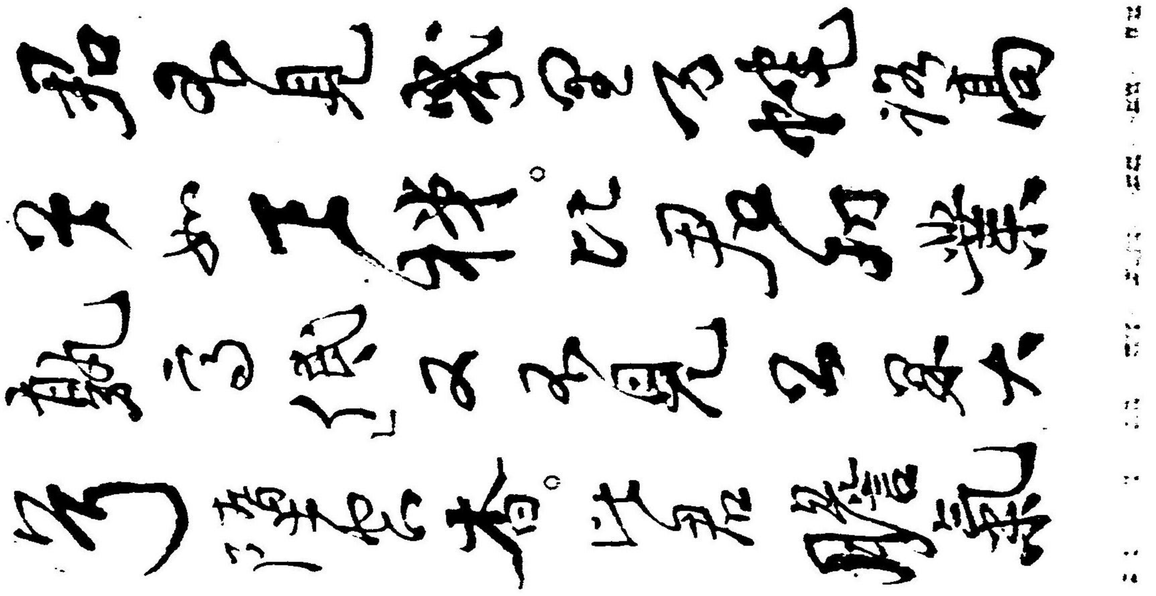
藤田軌達先生篡譯

亞弗利加内地

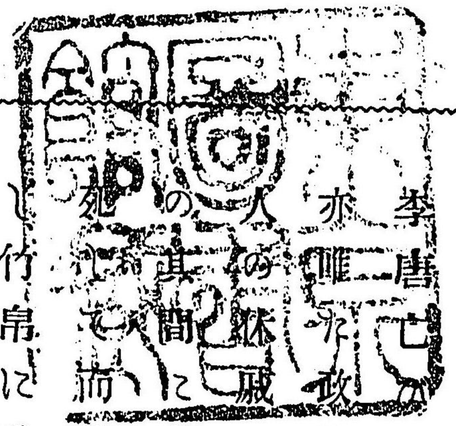
蘇丹探險實記

大阪　圖書出版會社藏版

ルクレーニ肖像



飢大小一讀再讀件書
卑就。誰是東洋蘇
村全
墨を嘗めし所著蘇丹令
探殺宮花
湖川鴻長



自序

李唐亡びて趙宋興り、平氏仆れて源氏起るも、亦唯だ政權の甲乙相移るのみ、世運の消長民人の休戚には、絶へて關する所なし、而して士の其間に處するもの、心血を傾け肝腦を碎き、死を捨て後止む、是れ世の以て忠勇義烈となし、竹帛に垂れ隆碑に刻みて、後昆に傳ふる所のもの、大局より達觀すれば、自ら溝瀆に縊れて悔ゐるを知らざるの小丈夫のみ、これを蘇丹令の偉業に視れば、其大小高卑果して如何

ぞや、亞弗利加の內地は瘴煙癘霧野に滿ちて、資るに糧なく行くに路なし、猛獸毒蛇は到處に出沒し、猺獠蠻族は隨處に徘徊し、其危害得て測られず、故に古來之を以て暗黑世界となし、未だ曾て探檢したる者あらざ、探檢したる者なきにあらずと雖ども、能く之を遂けたる者なきなり、獨り蘇丹令は邁往勇進して深く內部に入り、縱橫跋涉すること前後數回、那伊兒の河源を究め月山の絕巔に躋り、或は土蠻と戰ひ或は榛莽を拓く、其間人界と消息を絕

て備に艱難を嘗め、萬死の中に一生を得たるもの、幾度なるを知らざ。而して千挫不撓竟に能く其志を貫き、開明社會の爲めに方數十萬里の新版圖を擴張せり、暗陸の內部既に開かる、未だ數年ならずして、英佛獨伊爭ひて之を分割し、復た寸壤を餘さゞるに至れり、近着の西報を據れば、中央亞弗利加に大鉄道を敷設して、東西二洋を聯接せんとするの計畫ありと、是れ皆な蘇丹令の餘澤に出づ、蘇丹令の如きは實に十億人類の爲めに無比の勳功を

建てたる者、十九世紀の閣龍と謂ふ、亦溢稱にあらざ、今や國士自ら居る者目前の小利害に汲々し、俗間の小榮辱に拘々し、蕞爾たる一孤島の外別に男兒が功名を策すべきの地あるを知らざ、予が此書を譯す、豈に微意の存するなからんや

明治二十五年六月

天放道人識

凡例

一此書は主として蘇丹令と題せる英國倫敦近刊の原書に基き之を探撿家其人の自著紀行に參照し傍英米の新聞雜誌に載せたる事蹟を抄錄し長を裁ち短を補ひ以て一部の冊子となしたるものに係る今特に翻譯と標せざし て纂譯とせしは之が爲めなり

一飜譯の体徒らに原文に拘泥して一字一句も遺さゞらんとすれば文理通せざ語格立たざ冗漫に流れ煩雜に陷り人をして其旨意の存する所を會得する能はざらしむるの憾あり然れば本書は務めて此弊を避け專ら原文の意義を咀嚼して之を邦文に改作せるを旨とし必ざしも原

書の字句に執着せざ然れども事實に至りては特に慎重を加へ毛頭も敢て或は脱損せさらんことを期せり殊に書中會話書翰等特地に抄出せるものは許さん限り直譯を用ひ文字の爲めに原意を傷くるが如きことなし東西思想の同じからざる勢ひ然らざるを得ざるなり

一人名は右傍に單線を施し地名ハ複線を施すが如きは世間普通の成例に從ひ別に新例を出さず

譯者識

亞弗利加内地蘇丹令探檢實記

藤田軌遠譯

閲歴

蓋世の殊勳を立て絶代の偉業を成して名聲の宇内に赫々たる人物相踵て蹶出せる來だ十九世紀の盛なるが如きはあらず拔山倒海の勢を以て列國を席卷し累世の國王を指顧の間に廢立したる英雄あり羽を扶け翼を推き新權を雄邦の間に把握せる政治家あり其他哲學に理學に玄を鉤め奥を闡き以て千古の迷霧を排開したる者指を屈するに遑あらざれども身を微賤より起して獨立獨行眼に耐へ苦を忍びて一歩は一歩より地位を進め英主の知を懷ち壮風

雲の合に投せる彩脚能く萬里米霞の山河を踏破して暗黒世界に開明の光輝を放ち党に一大國土を開闢して古今無比の共立制度を創立したる蘇丹介の如きは寔に過群絶類と謂ふべき歟今日に在りては北交際場の大王と稱へられ到處に敬重せらるゝも亦決して偶然にわらざるなり

蘇丹介は今てそ功成り名遂げて王侯貴人も一たび北會に接するを以て光榮となすに至りたれ其素性を尋ぬれば名もなき野夫の孤兒なりけり千八百四十年の頃とかよ英國北威爾斯の寒村ヂンビィといへる地にジロオン、ロークンズと呼べる農夫あり家貧と貧しく朝は箱を踏で出て夕は屋を歌いて歸るまで寸陰も空に費さゝる日夜力作して纔に細き烟りを立つる細農なりければ其が先世は如何なる家柄なりしか系統さへに詳ならゝジロオン妻を娶りて一子を挙けジロオンと名づく是れを後來北類なき偉業を成す群雄兒なりけり實に千八百四十一年一月廿八日なり此兒二歳の時不幸にも父ジロオン病で歿しぬ左なきだに貧苦に堪へぬ家なれば母は幼兒を抱きて自ら生計を營む能はゝとて出で、他家へ下婢奉公に住込み幼兒は小父某より養育料を送ること、なりて村人へ頒けられ乳離れの頃に及びて小父の家へ引取れけりジロオンが五歳の冬小父の新婦此憐びべき孤兒を養育するをば頗はしく思ひ厭くもあらぬ家なれば永く處くことなり難しとて夫に勧め貧民學校へと送り入れける

貧民學校は非名に過ぎゝ下等社會の兒童を集めて教育す

る場所なれば粗暴なる悪少兒多けれとジロオンは生徒等
氣人に勝れ負けじ魂あるものなれば學校に入る間もなく
同年輩の中にて大將株となり遊技運動場に於ては常に其
の首位と仰がれて活潑なる舉動を現はせり左れど課業に
も亦た大抵勤勉にして情ら屯弥に地理と算術とに專ら心
を潛めたり居ること數年にして學業大に進み通常の書籍
は理會するに苦しまぬほどゝなりしかば是より彼首此首
の知己より種々の物の本なども借うて手當り任せに沙
獵るが中にも冒險的の勇ましき傳記又は紀行の類ひを愛
讀したりとぞ

ジロオンは年の長るに隨ひ益々奮勵にして堅忍の氣風
を發ひ初め己が意に期くと思ひ定めたることあれば飽く

まで之れを貫かんとしけるにぞ同輩と爭鬪すること頻々
柵久を遂には年長の頑童と烈しき撲鬪をなしたるが爲め
學校に止ることなり難くて物に校内を脱走しデビット、オ
ッユンといへる從兄の許に赴きて寄食人となりたり是は
ジロオンが齢十五となれる春の事なりとぞ從兄オッユン
はロールドと呼ぶ地に在りて小學校の教師を職業となし
居けるにぞジロオンを家に留め取敢へず教授の助手とな
しにけりジロオンは斯く思はぬ業に就き昨日と過ぎ今日
と暮して一年餘りを送りければ早くも天晴れの少年とは
なりにける此頃の事を知れる者の言にジロオンは我意强
く何事にも挑ませ屈せぬ精神を顯はし一度口より出した
る言語は固く執りて動かぬ顔に固き眼一見して異常

の男兒たるを知るに足りしと云へり

オツエンとジロオンは從兄弟の間柄なりとは云へ其の意風の隔絶せること甚しくジロオンは氣高き性質にて細部に拘はらざる快男兒なるにオウエンは鄙吝なる小人なりければ久しく其の家に在りて相下するを厭しとせず一日僅か數錢を懷中したるまゝ、憤然としてオウエンの家をおり數多の艱苦を嘗盡くして長き旅行をなし漸くにして英國なるリバアプール港に到れり此地は名高き港にて過船所の設けもあり商家軒を北べて賑ふ最も盛なれば港内に碇泊せる商船の悠樹は林の如くに立群び陸上に建聯ねたる三層四層の大厦高樓と相對峙し出る船あれば入る船あり石炭の烟焰と蔽いて時ならぬに白晝の天かと怪しなるジロオンは此の光景を見て「アヽ、壯んなるかなと獨りごちつゝ、茲に冒險的勇氣を發起しイデや海外に渡り我が運命を試んと志を決したり左れども悲しいかな田舍より初めて出てたる少年西を見ても東を見ても知邊といふもの一人もなく懷中また餘財なければ急に渡航の手蔓を求むるの道なく彼れ此れ苦辛し居る折ふと米國の商船にて客室付の停僱が入用なりとの話を聞出し直ちに本船に就きて雇入れを請ひしに許されければ首尾よく森四洋を渡りて米國ニウオレアンスに到着するを得たりゆゑ上陸はしたれども此處も亦た不知案内の土地なれば何れに身を寄せて生活を計らん便宜もなく前途悲々として如何なることに成行くやらん心細さこと限りなけれど孤身是れ時

とも称すべきジロオンは更に面する色なく身を立て志を成すは是よりなりと憤りを發し何處といふ當もなく市中をブラ〳〵徘徊しけるに但見れば或る商家の店頭に給仕入用と記したる小さき張紙を懸けありッと狂喜して進入りて雇はれたき旨を申入れけるに主人は是れまでの來歷を問取りて最と便なくや思ひけん柔和なる眼に愛を湛へて

少年よ汝は何をか能くする

と問ひければジロオンは少しも躊躇(ためら)はず

何にても我等が年齢の者に爲し得らるゝ事ならば

と答へたるに然らばとて遂に雇入れらるゝ事となりたり此の家の主人は姓名をヘンリイ、ボルトン、スムンレイといひ至て慈愛深き性質にてジロオンが年少くして他郷に彷

徳ひ身を托すべき人なきを憐み懇切に待遇しければジョオンも厚く其の恩を荷ひ諸事に心を用ひ力を惜まず忠實〳〵しく立働ける程に主人は一ト入愛憐しみ殺くならを奏ふて己れが子となし他に家産を相續すべき近親とてもあらざれば性〳〵は一家の財産を挙げて之を譲らんとまで心掛へせり是ぞ、ジョオン、ローランズが奇名を乗て群丹介と稱する由縁なりけり

不意に來る幸福は又意はぬ事にてあるものなりジョオンは群丹介家の養子となり將來數多の財産を繼承ぐべき恩ある身となりけるが天來た此の少年の眼縁幸福は以て孫賦の才力を發揚するに足らもとなし再び困厄の渦に投じて自然の發達を得たしひるの意なるにや久しからをして

ヂロオン、スタンレイは意外の失望に過へり、ジロオンが今の身にては天にも地にも憑料のなき一人の恩人たる義父ヘンリー、モルトンは急病の差起りて遺言狀を作るべき迄もなく俄然死去したり斯くと聞きて親戚姻類の人々集り來りて勝手に遺産を分配し去り此家の嫡子たる蘇丹令には何一つをも與へざりけりされども法律上遺産繼承の權を有せざれば如何ともする能はず蘇丹令が財産家の相續人たりと歡びしは一時の夢幻に歸し今は再び身外一物なき羇旅の少年とはなれり

斯くて蘇丹令は再び波風荒き世海に漂泊し資産なく知己なき者が遭遇すべき艱難に堪へつゝ種々の服業を執りて辛く露命を繋きける其後令樂國に彼の南北戰爭の事起り

國内二派に別れて干戈を交ゆるに至れり當時蘇丹令は南部の地に居住せしかば奮て南軍に加はりジロオンストーン將軍の部下に屬して一兵卒となり隨處に轉戰せるうち千八百六十二年四月ピッスバルグの大戰に俘虜となり敵の軍門に隨送せらるゝ途中衛兵の隙を窺ひて河中に身を投じ彈丸雨の如くに飛來るを避けながら辛く對岸に泳き渡りて機に窮厄を脫れたり此時蘇丹令偶々家郷を思ふの念を發し歸心矢の如くなりければ僅の品を行李に收めて英國に立歸り故郷の親戚を尋問たるに落拓の餘り服裝なども整はず極めて貧窮の狀なりしかば何處の親戚も稀くこそ歸りたれと喜ふものはなく、むらがなど言はんばかり冷かに待遇けれは故郷とはいへど身を處くに窮

なく足を留むること暫時にして再び英國に赴かんと此度は船の便に由りて紐育府へ上陸したるに忽ち同盟軍の逃亡者なりとして拘致せらるゝ身となりたり然れども此際は取尚は酷にて身体壯健の人を要する折なるにぞ幸ひに蘇丹命は政府海軍の水兵に編入せられて軍法會議の糾弾を免れぬ所なくて蘇丹命は軍艦ゴンデロが號に乗込ひべき命を受けたり是れ千八百六十三年の春の事にして爾より四ヶ月を經たる後選ばれて水師提督附となり專ら書記の事務を擔當せり既にして本艦は遠航接戦の命を受けたれば歐羅巴近く進航し遂に一度を打窺めたれども其の位地敵の砲臺に近くして之を押收するに不便なれば艦中の人々は如何せんと其が手段を評議しけり蘇丹命は人々が斯く躊躇ひ居るを見て猶然身を挺で海中に躍入り敵の砲臺より十間の巨砲を絶間なく發射するを事ともせず五百ヤードの海上を敵なく潜脱け纜を敵艦に結附けて早くも泳ぎ歸りければ諸艦其の勇氣に驚き吾を捨て稱賛せざるはなく水師提督は特に其の功を賞して曹長に抜擢し年俸三百五十弗を給せり其の後屢々戦を經しが彼の千八百六十五年一月フヒヨヤ砲臺興撃の役にも頗る力戦したりといふ

蘇丹命が乗込める軍艦は十ヶ月間遠洋巡航をなすこと、なりしかば隨て歐洲の各港を巡航して土耳其の首府君士丹丁堡に着しけり此時蘇丹命は數名の同僚と共に暇を請ひて上陸しゼルサレムに赴ばんと小亞細亞を旅行しける

に問行者が粗暴の挙動を為したるより本端を惹起しメルナといふ地に於て一行厳く地方官吏に捕拿せられけり此は非解立て本なく解放せられしかと其の後匪賊の難に遇て旅費餘りなく奪はれしのみか(此邊巨盜多し)反て強盜なりとの嫌疑を受け加へられて土地の官吏に引渡されたり元來土國は法律備はち屯敦治も行屆かざる未開國なれば如何なる危険に遇はんも測られ屯とて一行の人々色を失ひ安き心もあら屯如何なる急遽の變に臨みても自若として慌忙ざる蘇丹令い疾くも臨機の智略を廻らして故らに儼しき容体を装ひ米國海軍の士官に對し無禮を加ふるとは何事ぞ卿等は後難を慮れ屯やなと長嘯したるに其策圖に當りて官吏は顧る長縮しつ遽に一行の人々を釋放て

り蘇丹令等の一行は土京に能歩せる米國公使へ此趣きを具申し其が援けを得て厳しく土國政府へ談判を遂げ覚に巨額の損害賠償金を收領したり

蘇丹令は一行の人々と袖を分ちて再び英國なる故山に歸りしに郷衣歸郷とまでにはあらねとも前回の歸省に比すれば服装も立派にて携帯品なとも見苦しからぬより夫れに引屯るだけの好遇を受けたりける、此折りを以て蘇丹令は幼兒の時教育を受けたるアサアフの貧民學校に至り生徒に對ひ一場の談話をなしたる終尾に

予も曾て此學校の生徒たり世間に出で、疲れまで遂得たる進歩と將來成し得べき功績あらば予は之を此校に受けたる初歩教育の力に歸せん

と述べたり、賜暇の期日は自ら限りあれば滞在數周間にして米國へ歸りしが平素志す所あるを以て遂に海軍實長の職を辭したり

蘇丹合が次意は專ら新聞事業に從事せんとするに在り此時偶ま土耳印度人が殘害をなしたりとてシオークス部落遠征の擧ありしかば蘇丹合は此れを好機とし遂で紐育トリビウン及びミッツリイ、テロクラット同新聞社の通信員となりセルヤン遠征隊に從ひて戰地に赴き其の見聞せる所を細大洩らさず通信したるに其の紙上に發るや忽ち精細なり迅速なりとの好評世上に喧傳し大た聲價を增したるにぞ其後英國が亞非利加アビシニアと葛藤を生し征討軍を發遣せんとするに當り紐育ヘクルド新聞社は蘇丹合に對し「足下は英軍に從ひて我が社の特派通信者たるまじきや」と掛合へり蘇丹合は大に喜び

予は米人の戰ふを見たり印度人の戰ふを見たり今英人が兵を用ふるの狀を見るの機會に遇ふは深く願ふ所也

と答へて一隊に及ばず永諾したり

抑も此役たる亞非利加アビシニア王セオドールが不法にも數名の英國宣教師を監禁し掠奪して寄贈の處置をなせしのみならず剩さへ其不法を抗論せる領事をも捕へて獄に投じたるぞ事の起りなる頃は千八百六十七年なりき英國政府は最後手詰の談判として英人の監禁を解き相當の賠償を爲すべしと迫りけるもアビシニア王は耳を左右に托して兎角の答へをなさいるにぞ英政府は王が尊開に

付して北の要求を容れざらんとするを察し今を印度孟買に駐屯する軍隊に傳へ迅でアビシニアの境に入らしめたり此征討軍の大將はナピール將軍とぞ聞ねし

蘇丹今は直ちに米國を發し泰西洋を渡りて亞非利加に到り英軍に合せしが幾途したりければ從軍の用意整はゝ固より此種の戰爭には經驗なき身なれば英軍一たび國境に臨さば時を移さず勝敗の決することならんと信じ長途行軍に必要の闕度たる天幕さへも新さを太と輕侮にいでたちしも理なり然るに案外にも多くの時日を費し征時久しきに彌れるのみか氣候は惡しくて雨降續きしかば其困難即ふるに物なく僅に野牛の皮もて製せる一個の裝を携へたるにて凌ぐ從ぐを得たりといふ是も一は經驗な

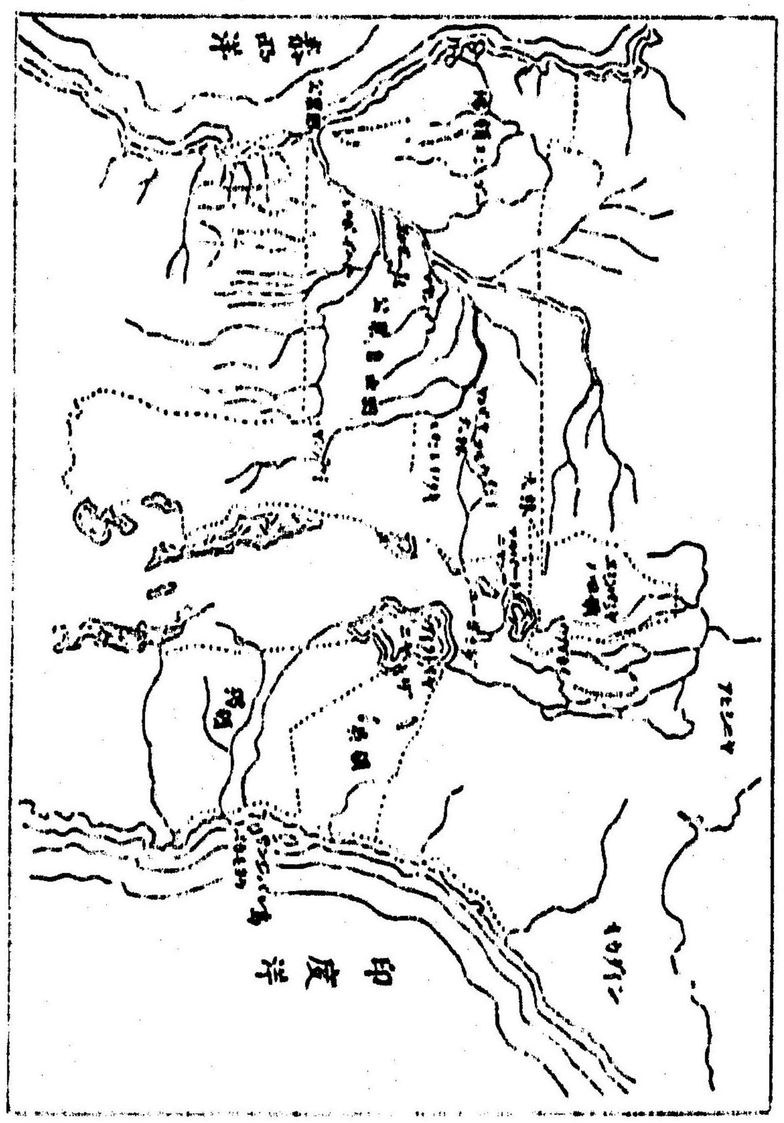
きに因るとはいへ英兵マルダクを與ふとの飛報に接し爲夜兼程して軍に赴くの必要ありしと云へばまた無理ならぬ事ぞかし

既に戰の始まるや蘇丹今は危を踏み險を冒して彼我の形勢より勝敗の模樣に至るまで須臾遺す所なく通信し殊に土人の風俗習慣を寫せしに至りては雄々生動して恰も一幅の畫圖を看るが如く身萬里を隔つるを忘れて親しく其況を感ずの想ひあらしむ其が通信中にマルダクの光景を描寫せる一節に云へり

此首邑は海面を抜く一萬尺の山嶺に在りて三面絶壁屏風壁立し廣大の深淵之を環繞せり而して船舶を繫泊すべき海を距ること實に四百英里餘と近づく可らざる天險な

り云々

英軍は此天險の官邑を側で攻むること太た急なり其將に陥ちんとせるとき蘇丹今は英將に誘はれてヤンダクに近き山上に登り俯して山麓を瞰るに城中の光景眼下に在りて王宮兵營廐柵の形狀より城兵が死守防禦せる休なと歴々一望の中に映し來れり但見ればアナ無慙や手足に械枷を施したる亦裸の死骸が累々と三百ばかりも堆く積重ねあり蘇丹今も英將も此慘狀を一見して酸鼻に堪へぬ思はぬも面を背けて嗟嘆せり是れぞセオドル王が最終の歸戻なりけり尋で世人の知れるが如く城陥り王自害して死し此牧の間を結びければ蘇丹今も此地を去りて歐洲へ赴きたるに此時西班牙に革命の亂起りしかば新聞紙の指示に



從ひて西班牙に至り亦た其の形勢を視察して報道する事に從へり

第一回　探檢（李備克斯頓の捜索）

英國の探檢家に李備克斯頓といふ者あり中央亞非利加探檢の事を思立ち少數の從卒を率ひて深く内地に入り歐洲人が足跡の到らざる境を跋渉しつゝありしに千八百六十六年十二月十日の日附けにて在亞非利加ザンジバル船シイツルドといふ名にて發したる倩書英國外務省に到達したり是は李備克斯頓が殺害を報せる倩書にして其が暴動及び死狀等を詳に叙しありければ大に世人を驚かしたり今此報の由來する所を繹ぬるに李備克斯頓が從卒の長と

して跡行せしアリイ・コーッといへる者(英人にあらず)の口より出でたるにて言ふ所極めて詳細なりしかば初めの程は何人もこれを信じ一點の疑ひをも容るゝ者あらざりき獨りロデリック、マルチャンといふ人あり此語には前後相はぬ破綻あるを發見し之れを指摘したるより疑ひを其が盛實に狹ひ者漸くに出來り推測に推測を加へたる末究に李備克斯頓の殺害に遭ひたりと云ふは全く捏造に出でたる說ならんとの論斷大に勢力を得たりけり因りて英國は勿論欧米諸國にては如何にもして其眞僞を確めたしとの念を懷く者を生じ日を經るに隨ひ其勢力倍々熾を加へ果ては世界の輿論は之を明知せざれば滿足すべからずと云ふの點にまで進み李備克斯頓にして因縁に陷り居らば

援助を與へて本國に逃れ歸らざるべからずと要求して止まざるに至れり是に於て英政府も今は傍觀すべきにあらずとて竟に一小遠征隊を派遣して搜索するに決し其の準備を爲すと聞ねしかば四方より我れも〳〵と此勞に任せんことを願ひ者出來れり政府は其中にて海軍士官ヤング陸軍士官ファルクヤルの兩人を擧げ遠征隊の指揮を司らしむる事とし此一隊は千八百六十七年六月十一日を以て英國を發して頗非利加に入り李備克斯頓が殺害せられたりといふ地に進みて尖々探究を遂げ其の安否に關聽を決うたる確證を得てければ此地に於て殺害に遇へりとの說は最早疑ふべくもなき虛報となりけり左れども其殺されざりしといふ證左は以て其後果して死せりといふ事實を

證明するに足らを彼は那處に向ひて出發したるを彼は今何處に在るぞとの點に至ては久しく昔信不通なれば絶ねて之を知るに由なし遊征隊は百方捜索に手を盡したれども萬里の山河、杳靄漠々として蹤跡を知るの手懸すら見出し得を空しく還り來りければ彼の離譽盛なる探偵家の運命をば徒らに世人が想像に描くに任すのみ

蘇丹令が不撓の精神と非凡の才略とを世上に顯はすべゝ機會は正に到來せり千八百六十九年八月十七日の真夜半過ぎ佛國巴里府なるクランドホテルの階段を急ぎ足に昇せ登り但ある寂寞の戸を拍ちて案内を請ふ一壯年あり裡面よりこれに應じて

入るべし誰ぞ

僕の名は蘇丹令と申す貴下よりの電報に依り四班牙より只今參殺したり、

ア、然り、坐し玉へ予は緊急の事あり足下を煩はせり、

と言ひつゝ、床上より下りて手早く衣服を纏へり這は別人ならを紐育へウルド新聞社の主幹ベンネットなり主幹は唐突に

足下は幸備克斯頓は那處にありと考ふるや、

僕は敢に其所在を知らを、

足下は彼が生存し居ると思ふ乎、

蘇丹令は斯る問ひに迫ふも固より確答すべき道なければ生存し居るかと思はるべき事也もあれど或は死したらんも計り難しと我が推測せる所の要領を告げれば主幹は點

聞き

好し、予は李備克斯頓は尚ほ生存し居り、これを見出すことを能はざるにあらずと信ぜ而して此捜索には足下を遣らんと欲す、

何と、貴下は眞に僕が能く李備克斯頓を索ね出し得べしと思ふ乎貴下の意味は僕に中央亞非利加へ遣けと言ふに在る乎、

と、叫べり主幹は直ちに答へて

然り、足下ならで此重任を仕果ふする者なしと覺ふ、故に此事を托せんとて特に足下を煩したり、

蘇丹令は主幹が己を信ぜる事の厚きに感じ遂に李備克斯頓が所在を捜索する任を負ふて亞非利加に入るべしと承引ければ主幹も大に歎びて、

捜索の方案は一に足下自らの指揮に任せん、唯李備克斯頓を見出せよ、

とて談話の間を結びたり

是れにて亞非利加探検の事は決定し了れり實務家の事を語るは個短に要を提くるのみにて老婆が呢々として同じ言を繰返すの類あらぬ蘇丹令は期く決定せし上は時を移さぬ事に從ふべしとて翌日起程したるが其目的は極々秘して世に公にせぬ殊に亞非利加に進むに先ち隣處にて調査すべき事どもあるにぞ表面には土都君土坦丁堡に赴きクリッヒヤ戰場の跡を訪ひ高架索を越て波爾期に入り尖より印度に出て視察を爲すと宣言したり世上にては深く

此の旅行を怪み個々の取沙汰をなせしが中にも最も笑ふべきは紐育の某新聞が其紙上に、是れ盛陽のみ蘇丹令は現に紐育府内なる或る旅館に潜みあり其が面を人に示さゝる約を以て最と上等の飲食なし居れり」と公然記載したるにぞある、左れば一般世人も此宣言を以て紐育へクルに新聞紙が誇大の廣告に過ぎゞなし別に注意を加へたる者とてはなかりき是より千八百七十二年に至れるまでは蘇丹令が音信は打絶えて聞ふる所あらゞ其の音信の聞えたる時こそ則ち世界の耳目を震動したる時なれ、蘇丹令は世人が其踪跡に關して疑惑せる間に早くも亞非利加に入りナイル河を溯りて準備克期朝が行方を探ぐるに必要なる調査を遂げ夫より步を轉じて小亞細亞に向ひセルサレムに於てゥアレンに面談し、赤ゥリョヤ廠場を過ぎトレビゾンドに至りて亞拉比亞の旅行家バルグレーブに就き其意見を叩きアイクンに出て露國公使に面會し孟買より海に航し亞非利加の東岸ザンジバル島に着せり此島は印度洋に面せる亞非利加の屬島にして獨に貿易の盛なるより歐米人も多く居住し往來繁き地なり時に千八百七十一年一月六日の事なりき此航海中に端なくもウォルヤム、アルダに出會ひ共に語りて五に拾がたき恩ひありければ蘇丹令は今度思立てる探撿の事實を打明け遂にウォルヤムを探撿隊の一等士官となしけり此人が後に蘇丹令を輔佐したる功は太だ多しとぞ

蘇丹令はザンジバル島に於て隨行者を募りしに雀て火探

探索スベークに作ひてナイル河の源頭を探検せしゐを以て勵章を有する五名の婦人を始とし數多の壯夫、孫に應せし其中にモンペイと云へる亞拉比亞人も加はりたり此外には米國軍艦チバダ號の醫士官ウィルヤム、レロウと喚ふ倫敦生れの男ありこれに通譯、給使を合せて上下二十九人なり既に内地に踏込みては無人の境にあらざれば土盤の彼方此方に散在して部落をなし居るのみなるにそ固より貨幣などの通用すべきにあらざれば探奥の地に至らんとするには隙かじめ土人の好ぶ物品を選みて携へ行き食料と交換するの準備をなすこと肝要なり今藥丹介が携ずものを擧ぐれば食糧、料理器具、天幕、小舟、寒暖の衣服、毛布等の外、土盤酋長への贈物又は食料と貿易の爲め用意せる鏡、金巾、真鍮の針線、頸飾のガラス玉等總べて八十二桶に及べり尚ほ此他にも戰銃、短銃、刀劍、弩、槍等諸備に須要なる各種の武器を携へ乘馬二頭、驢馬七頭を曳きて愈々探検の途に上れり此等の準備をなす爲めに二十八日の日子と莫大の費金とを要せしかどヘクルド新聞社は此の事件に就き幾何の費金を費すも惜むに足らずといふ意氣込にて藥丹介が求めるまに〳〵爲替を送りければ斯く十分の準備をなし得たるものとは知られたり

藥丹介が率ゐたる探検隊の一行ハヴレジバル嶋より船に搭して海上二十五英里を航し亞非利加の要港バカモッウに渡り此地にて百方手を盡し土盤百六十三人を雇ひて荷物を運搬せしひることゝせしかバ總員百九十二人

とゝなりたり之れを五手に分ち第一隊は二月十八日を以て發程し次で二三四の順を追ひて途に就き蘇丹介は第五隊を將ゐて最後に出發せり是れ三月二十一日の事にて同月三十一日にキンガワウに着したり左れど第四隊は途中にて如何なる障碍を蒙りしにや未だ此地に着せざりしかば五日間空しく滯在したり此時既に蘇丹介が將ゐたる第五隊中には早くも一名の人夫脱逃し十名の病者を生じ二頭の馬は斃れぬ

四月六日インヒキィの方角に向ひ進みけるに此處よりコージアに至る間は口に見る限り一面の彈藪にて朽腐れたる名も知れぬ草木より蒸騰れる臭氣の鼻を衝きて堪へ難かりき

キセモウに於て且く足を休めたり此村の背後にはアンゲレンケリイの河流る此の水は來に至りてタンガニイ河に合するものなり

ニハクアに着しける時第四隊復た後れて第五隊に追着かる此處にて亞拉比亞人(內地に入來りて貿易を爲すは多く亞人なり)に遇ふ其が言ふ所を聞くにコージいと稱する地に於て白皆の旅人を見たり其人は年老ゐ病後と見ゐて身体も極めて衰憊し居たりと云へり

次にハシイジバンウェイに近き河邊なる岡上に行き次りけるに蘇丹介は此地にて初度の亞非利加熱に罹りたれど緩けてキィニィを服したるに依り率にして速に輕快を覺ゐけり此地はバガモロウを距ること僅に百十九英里許な

るにこれを經過するが爲め二十九日を費したるは旅行の始めにて路事不慣なると第四隊の兎角遲延したるとに因れり

此頃より漸く霖雨の候に入りければ淫雨連日降續きて晴天を見る能はざる間上の屯營へ忽ち泥濘の中に沒し去り加ふるに隨行の人夫が放縱極りなきにぞ北の汚穢しき甚へ忍ぶべくもあらざる剩さへ路の肥的虫蝨とも幾千萬とも知れぞゾロ〳〵と群至り中にも赤、黑、白の色したる大蟻あり黄なる頭せる体大の蜂ありて北の人を螫すや蜂よりも激しき疼を與ふまた小鼠かと思はるゝばかりの甲蟲四邊を遶回るあり其他有るとあらゆる形、色したる虫類を以て地面を覆ひ、林叢に繁茂せる木の抄、草の葉などは小蟲にて充

滿し恰も草木自らが生動するかと怪ひばかりなり

五日を經たる後雨少しく霽ちざければ河を渡りてマカ〻を過ぐるにコゴウゴウに至るまでは一体に低地なれば連日の雨にて到處水に浸され居り其れのみならず所々に沼澤ありて深さ一尺より三尺に至れり斯る沼澤を渡ること凡そ三十英里に及べるにぞ人々疲れ困ざるはなく拠て加て瘧病に罹れたる者なれば續々病を發するの悲境に陥れり

レンチッツに達し漸く乾土を得たれば稍に生きたる心地しつ此に暫く駐屯して疲困を息め發生を加へけるが泥水を渡りたるに因り脚の如きも相續で腫れ餘す所は贏痩せるもの僅に五頭のみとなり薬丹分も亦た亦病に罹り殆ど

危篤に陥いりしも幸ひに治す事を得たり

ヤオクに至れる時第三隊に追着けり此手の隊長フオルカハルは激烈なる熱病に侵され起つ能はざれば直に第三第五の両隊を合して進ひに決せり

マアヂツアに留り此處にて三日間の滞留を命せり此頃の邪なりきコアウイツクといふ異様の小蟲に喫はれて非常に困難したる事あり蘇丹令は其困狀を記錄中に載して云へり

此害虫の勢だしき予が天幕には千を以て數ふべく予が鈎床には百を以て數ふべく予が次服には幾十となく予が頸筋には幾正となく群れりこれを他の風蚊蚤蝨に比するも甚うるさきこと數ふべきものあらぢ云々

此邊は凡べてアンヤンヂビイ地方に屬し氣質最も粗き俱人の占居する地方なり蘇丹令は今やユージに向ひて進行せんとするに當り一の能くべき報に接せり汗を如何にと言ふに此よりユージに至るべき直線の道路には亞非利加の那破烈翁と稱へらるゝミツンボーと喚ふ蠻將實は亞陀ありて遮斷し通行するを得ざるとの事是れなり此の蠻將ミツンボーは次く亞拉比亞の隊商を憎み之と戰を交ゆる邪歴々にて今は鑑敵の如き惡ひあり彼れ常に宜言すらくアンヤンヂビイ地方復た亞拉比亞人の足跡を收めざる限りは皆て戈を釋かざるべし彼の商隊もし此地方を經てユージに赴かんとせば我が屍を履越て行くべしと當時近傍に屯在せる亞拉比亞人等は彼れが此の如き惡聲

を意となさも必勝を期して迎戰せんと願決せり蘇丹谷も前約を忘ぐの心より亞拉比亞人と共に盤將を打破りて鬱故けんと意を決し相率ゐてマッヒトウに至る此地には二千二百五十の亞拉比亞兵あり其の中の千五百名までは皆な軍銃を携帶し居れり

八月三日過でユーマンタに達す此日蘇丹谷は復び熱病を發し頗る劇烈なりしが間もなく快復に就けり

翌四日アンヤンニンピイ道に沿ひて森林を出でたる際忽ち敵兵四方に起りて發砲したれども敵なく之を逐却けしが六日の夜に至り敵將ヨランボーは大膽なる策に出て我が陣に夜襲を試みしに我は期るべしとも思ひ設けもいなかなく寢込みたる不意を射れしかなればスハ大變と言ひも敗へも四方八面に亂れ散り復た收まるべくもあらも亞人の如きは逃早くも敗走して影も留めもなりにけり然れども跡に殘れる我が兵は各々利器を携へたるがゆゑ那道に群りて打立て揃立しける程に敵兵の殺傷極て多くッコ〳〵に退きたる翌朝に至りて蘇丹谷は同盟の亞兵が能く爲すなきを知り亞將に面會し冷語を放ちて其怯懦を刺り覺に之と手を分て南方に向ひたり左れど此方面に於ける危險の度は少しも減却したるにはあらも

八月十三日南隊の海岸より來れるに過へり彼等は先きにマアアツアに殘りて病を發ひ居たる我が隊の士官ファルクヘルが死去を報せり此報に接するや不思議にも翌日より士官シロッが病を獲て危篤の容体を現はせり後に聞ム

れば彼の李備克斯領がコージッに赴けるは此時ごろの事なりけり

蘇丹合の一行は四面敵地の中に在るさへ困難なるに死亡、病疫相連ざて臨一人として健かに歩行し得る者あらねば意はそも時日を移せしが漸く數名の土人を雇ふて運搬の人夫となし二名の衆内者をも得てければ漸に勇氣を挽回し九月二十日を以て薩の如く南に向ひて發途したり是れより先き五隊相合して一となり此の處まで進みけるが死亡の外に逃亡したる人夫も少くなからねば今は總員を合して五十六人とはなれり其の中にて白皙人種といへば蘇丹合とレロウとの二人わるのみ彼のスペールの隨行者たりしモンベイは極めて火性にて怒易き男なれば早くも不平を抱き何れへか逃亡して行方も知れぬなりにけり

土官レロウの病患ハ愈々劇しくなり往きて今は張詰めし精神も頽りけん斯る不毛の地に入込みたるを深く悔わ身の暇を與へよと屢々請ひて止ざれば蘇丹合も然らばとて遂に其の意に任せ其月二十七日に袂を分つ事に決し蘇丹合は殘る人數を二列に並べ一基の幟を眞先きに押立て、南に進めばレロウは人夫に荷はれて北に向ひて歸途に就けり

斯くて蘇丹合ハ切りに一行の人々を勵まし南を投して勇進しけるに熱病の餘ひは日又日に猖獗を逞うし感染する者少なからねば人夫の病に染ひを恐れて逃走するもの愈多く人員漸次に減少しけるにぞ土蠻の部落にて法外なる

附物の要求を受くることも往々ありけり加ふるに猛獣蛇の害も一層甚しく或る時蘇丹介は河水に浴して肩の垢を落さんと但ある河邊に下立ちけるに五六の鰐が泥を衝て跳出で只一番に飲下さんとしたりけるを目早く認めて辛く岸上に避け其が腹中に葬らるゝを免かれたる事あり又或る時ハ隊中に叛心を抱く者生じて銃を把り蘇丹介が胸前に擬したるあり其の危きこと間髪を容れざりしも命運強き蘇丹介ハ此等の危難を脱れ得たり此際千辛萬苦の狀は筆墨の能く寫し得る所にあらざるべし

十一月三日商隊のマンエヤより來れるに過へり隊中の一人蘇丹介に告ぐるに一名の白人ニージいに到着したるを以てす是れ實に欣躍ふべきの吉報ありければ蘇丹介は部下の勢を集めて

吾人が目的を遂するも最早遠きにあらずと発ゆるなれば今よりは無益の休足をなさず勇進しては如何、若し我が言に從はゞ重き賞品を與へん、

との旨を演述せしに衆人皆て命に從はんことを請ひけれは直ちにイシンカ村を發して進發したり此邊りに部落を構へし酋長等に通開税を課せられしも輕からざりしが中にもカヒリヤの部落にてハ其要求ハ太だ法外なり因りて蘇丹介は陽に承諾の旨を答へ從き其の夜更開け人定るを窺ひ竊に起きて出發し案内者の首に從ひて方角を四に取りて進みたるに迷ふて途を失ひ竹林の中に入り其の中を直走りに走りける程に研ぎたる竹の篇めに脚向脛など

突破られたる若干く血は流れて鍵脚を渡し死ち紅進の波を越えたる如く荒逸に茂る草の葉に淋漓たる血の痕を殘せり暫く走れる間にも追兵至れりと驚立て竹の枝に鳴求めし宿鳥を驚かせしも幾回なるを知らも

天い既に明けたれも追兵覺に至らされば機に胸を安んじて只管路を食りけり此日天氣晴朗にして空間一點の雲を見も竹林潮く鏡くれば嘯潮なる原野來る青々たる綠草は朝黃色の敷物を延べるが如くミカヤイ河は北間に横へり て一條の素練を懸け恰も此一行の人々を迎へ慰ひるものに似たり

日を重ね月を閲して幾多の艱苦を作め盡せるも北の希望は唯此の廣野の中に於て雄壯而き白人に敵會せんとする

に外ならも今や蘇丹命が此希望を遂すべき時機は已に面前に來れり是に於て蘇丹命い次服を改めて面會の準備をなし夫より各々勇を鼓し氣を勵して行くこと來た幾くなちも忽ち一座の山麓に屆れり衆相呼應して息をも吻かも一走直ちに山嶺に逸せしかば一行は眺望よき處に集りて四邊の光景を視渡しけるに眼下に閃々として日光に映寫せる一大鏡面ありけり是れ何物ぞ眸を定めて熟視れば是れぞ此れタンガニカの湖なりけり蘇丹命は覺ねも大聲を發して

ハーロー(驚きたる時發する聲)、

と叫びけるにぞ衆皆な之を和したりける此は人々が我を忘れて肺腑より發したるなれば近き仂りの森林に傳へて

剛に逐撃せる群の凄まじなんと言ふばかりなし蘇丹令は更に命を傳たへ巻きたる帽を解下し銃に硝薬を装塡せしめ少しく山を下りて足場を計り一二三の被襟にて姿勢を正させ打と令する群の下に五十餘挺の戰銃を一斉に發射したり此音に此山の半腹に居住せる彼のユージャの村人は如何なる椿事の起りしかと驚くこと大方ならも人々家を立出で、此方を投して來りしが其の中の一人は蘇丹令の容貌をヂッと見て

グード、モーニング、サア斯る惡戯を爲せるは何者ぞ、

と笑語を以て語し彼くれば蘇丹令は

何に、

と言ひしのみにて彼の人を打讃れり、件の男は少しく歩を

廻めて

予はスージーとてドクトル李備克斯頓の僕なり、

斯くと聞ける時、蘇丹令は胸間猛に悸動し來り、驚喜交も成情を激して眼の眩まぬばかりなれば其の語音も常の調子と異りて少し顫を帯び

何、李備克斯頓君は此處に居らるゝとや其は實際なるか、實際とか今まで一所に居り今爰へ來れるなり、

と答ふる折柄他の男出來りて談話を繼ぎければスージーは我が住む家に馳歸りて李備克斯頓に云々と告知せり」

蘇丹令は人々と共にユージャ村の入口に至りけるに半月形に立並びたる亞拉比亞人の中央に色の褪めし綠の綿ある帽を冠り赤き袖の上衣を着せる一個の白人ぞ立居たり

蘇丹令はソレと見るより飛附きて磯に手を彼け僕き抱へんを心地したれどもヂッと心を鎮めて其が面前に進み

ドクトル李備克斯頓君なちんと予は推定す、

と言かくれば彼れは

然り、

と答へたるまゝ、帽を脱せり、是に於て雙方に手を伸して握手の禮を爲し蘇丹令へ重ねて

予へ誠に上帝に謝す遂なく足下に見ゆることを得たるを、

と述べ夫より相共に李備克斯頓が寓所に至りける此時李備克斯頓は重病に罹りたる後にて身体も餘ほど衰弱し見る影もなし其が艱苦を嘗めたる模樣は蘇丹令が目記中に

予は數度の戰場を經歷し革命をも目擊し暴殺をも實見し其の他悲むべき事實れなる事をも聞し盡したれと未た李備克斯頓が飢寒、困窮、悲痛、失望、を極めたる談話を聞きたる時ほど予が感情を動かしたることはあらじと、

と記せるにても其の困難なりし狀態の尋常にあらざるを概見するに餘りあるべし

李備克斯頓に宛て本國より送りたる荷物へ其の運搬を奴隷賣買と象牙賣買とを營む商人に托しけるに件の商人は中途にて賣拂ひ之を押領せるにぞ李備克斯頓は非常の窮乏に陷り死に瀕せし事も前後幾回なるを知らぬ殊に蘇丹令がコージャ村に到達したる時の如きは最も疲困を極めたる際にして日々の給料すら金から也幾ぬ絶望の域に沈

み居れり左れと一たび蘇丹令に出遇ひたるより萬事北が救援に依りて何不自由なき身となり大に精神を安せるより日を逐ふて健康に復し最早旅行にも堪へ得るまでに至りしかば相携へて近郊を逍遥する日も多かりし

從兵等が結驃せる小主、大主(蘇丹令と李備克斯頓)は俱に間れる度の增すに從ひて意氣相投じ情交日に密となりければ

イデやダンガーカ湖とルージィ河とを探檢すべしとてコージいの寓居を立出て廿八日間を費して湖上の巡航を終りたり此巡航にて從來の疑案たるルージィ河のダンガーカ湖に注入するや如何にとの問題を決定し河水の湖中に注入するは毋はれぬ事實となれり

蘇丹令の今回探檢の目的たる李備克斯頓が存亡を確め北の所在をも突留たれば今は健地にあるの要なし歸國すべしと思立ち李備克斯頓に對ひて

足下が病餘衰弱の身にては此上の艱難に堪んこと覺束なし予と俱に本國に歸られよ、

と勸めたれども李備克斯頓は頑然として動かゼ

予は予の宿志たるナイル河源の究尋を了へざれば死するとも歸國するの意なし、

と云て從はざれば蘇丹令は暇を告し

一先づ歸り再び來るも幼げも、

と說きけるも其の志を翻へすべき氣色なきを見て遂に其の意に任せ蘇丹令の一行のみ歸國するに決せしが李備克斯頓を救援する爲め齎し來れる荷物はアンヤンエンビィ

に居住せる亞拉比亞人に寄下あれば此れまで同伴すべしとて土人及び亞拉比亞人より食糧、牛、驢等を買入れ十二月二十七日李備克斯頓の主從六人、蘇丹令の一行五十餘人打連れてニージャ村を出發しトングッィまでは小舟にて渡り尖より陸路ミッンヤィに向へり此途中但ある山陰けを過きける折しも蛇の間より一群れの蚊、空を蔽ふて襲ひ來りブン〳〵と唸り立て李、蘇一行目懸けて面頭手足の嫌ひなく鋭き嘴もて刺けるにど人々亂れて狂氣の如く牛、驢すら非尾の毒に堪かねて狂出し解まるべきもあらも李備克斯頓、蘇丹令の兩人も劇しき刺傷を負ひ面脹れ手足腫れて目も當られぬ姿とあり道々の休にてマッルーに着したり此處にて漸に手を分ちたる士官ンロウがキヘクに於て死去したるの報を聞けり

一行は道なき路を行く事なれば意外に時日を費して漸く翌年二月十八日を以てアンヤンエンビィに着しける此地にて李備克斯頓は交付すべき荷物の滯留しありけれども保管宜きを得ざりしと意外の日數を經たるとにて何れも敗朽ちぬはなく物の用に立べくもあらざれば大に落みを失ひしが今は悔みても甲の詮なしと斷念め蘇丹令が携へたる物品糧食の類ひを分與へて此後の用に當て此にて缺別する非とへなれり、疑き事知らぬ旅にても故郷の人と聞くからは恣谷逆者の思ひあり況してや交れる日は淺くとも互に意氣の投合して個蓋故人の如き蘇丹令と李備克斯頓は別に臨て懇々の情に堪へす李備克斯頓ハ蘇丹令を見

遂りて村外まで至りしが別くては果じと氣を勵し遂に最後の握手をなし見返り〳〵立別れぬ是れ三月十四日の事なりき

蘇丹介の一行ハ元と來し道を辿るなれば歩きに過ぎたる時の如く沼澤を沙り密藪を穿つなど艱難の旅行たるは始めに變るべくもあらねど其は繁雜の實詳もて形容せもあれ蘇丹介が左の短簡なる切實は之を盡すに餘りあり

吾々の頭上には互蛾あり吾々の脚下には毒蛇あり吾々の呼吸する空氣中にはマラリヤ(熱病毒)あり途に當れる猛獣一たび足を踏せば人をして倒旋狂廻せしむるに至るあり云々

以て其の一斑を想見すべし

蘇丹介ハ五月六日を以て悲なくバカモンウ港に歸着せり此路程は五百二十五英里あり實に三十五日間にして遂したるあり同港には英國地理協會より發遣せる探檢隊あり

て今や李備克斯頓の所在捜索の目的を以て内地に踏込せんとする際なりけり是ハ李氏の子なるオスウェル、李備克斯頓といふ者一隊の指揮を司れりと聞き蘇丹介は其の見聞せる所及び老李の消息を語り救援を送り糧食を給供するの急須なる旨を說きて別を告げ翌日ザンジバル島に歸航し此にて隨行し來れる土人等の雇を解きて更らに其の中より忠實やかなる者二十名を選拔して新探檢隊の案内者となさしめたり然るにオスウェルは父に似ず百般不換の氣象なき懶夫と見ね蘇丹介が經歷を聞きて遂に心腦しけ

ん自ら此重任を負ふに堪へもとて新探撿隊の將として內地に入るを辭しければ一個の亞拉比亞人を屬ふて之を率ゐしむることゝなせり此隊の一行は都合五十七人にして五月二十日バカモッウを出發せり其準備萬端は總べて蘇丹令が幹理の下に整へりと聞き

蘇丹令は新探撿隊が出發したるより九日を經てゼンジバル船を去り歐羅巴に歸り其のまゝ歐洲に滯在せり

發し蘇丹令がヘクルト社より準備克斯頓搜索の依頼を受けしは千八百六十九年八月にして其亞非利加內地に向て

ゼンジバル船を發せしは七十一年二月五日なれば其の間已に一年有半の日子を費し內地に在ること復た一年三ケ月餘りにて翌七十二年五月七日ゼンジバル船に歸着したるなれば此探撿は前後四年に彌りしものと知るべし

千八百七十三年の暮に至り英國政府がウオルスレイ將軍を遣りて亞非利加アッスシヤンティを征討せしむるの擧あり此時も復た蘇丹令は紐育ヘッルド新聞社の特派通信員となりて英軍に從ひ其戰狀を世間に報道しけり蘇丹令はウオルスレイが徒らに攻伐を事として平和に局を結ぶを忘れたるを指斥して痛く其の處置を非難したるが此論斷は稍々酷に過ぎたりとするも人以て甚しき失當の批評ならずとせり事平きて後また歐洲に歸り來れり

居る幾くならずして蘇丹令は悲ひべき凶報に接し知己準備克斯頓の喪に走れり準備克斯頓は千八百七十三年五月四日中央亞非利加ヒッサといふ地に於て赤痢を患ひ遂に泉

下の旅客となりければ其遺骸を英國に齎歸り翌年四月志ロをトしてウエストミンスタア院に葬ける、そも此の帝に葬らるゝは大勲偉功ある人ならでゝ叶はざるの特例なりと し聞けるに今や此墓れ高き壁越に其の墓碑を列せるは勲功の偉大なるを後世に傳ふるものにて此特遇は李備克斯頓が生前の艱苦を慰るに足るとこそ云ふべけれ滋丹介は我と志を同うせる長友とも稱すべき李備克斯頓の喪に遇ひて深く其の知己を亡へるを悲悼せり亦た宜べなりと言ふべし

第二回　探檢　（中央亞非利加の橫絶）

不撓不屈の資を以て其が宿昔の志を遂げんと一身を獻じて未曾有の大業に從事したる李備克斯頓は悲ひべし天、年を假さず彼らに志を齎らして命を從烟瘴霧の間に落しければ大業中途にして廢れ復た繼で興る者あらざ李備克斯頓が宿昔の志、未曾有の大業とは今更事新しく云ふまでもなし彼れが蘇丹介の歸國を勸ひる容容に對して明言したるが如くナイルの河源を究尋して之が實相を世上に告げ失の古來より不可思議に屬せる問題を確定せんとするにどある、抑もナイルの河源に就きてゝ紀元前四百五十年の古昔し希臘の史家ヘロトタスの時代より一の不可思議に屬し世々代々あらゆる推測を下せる者あれども嘗一人其の實相を究むるに至らず近來スペーク其の他の探檢家ありて稍々方向は定りたれども是れとて實地に就きて確なる

歴左を見出したりと云ふにあらねば唯だ信に近き推定とするに過ぎず

森丹介は幸備克斯頓の死去したるより其が志を繼ぎて河源究尋の目的を遂げんものをと思起し亦た志を此の事に潜め亞非利加の内地に開はる書とし開けば旅日記や犯行の類は更にも云へず寸斷たる書簡、一片の反故までも價を問へも買染めて熱讀せるうへ更に此時黒大陸の地理、氣候動植物、人種の如何をば最とも精しく研究し是非とも此の暗黒なる世界に開明の光輝を放たんと欲意したる中變あうて研究を要すべき事柄は悉く胸の裏に蔵めしかばイデ此上は資金を得るの策を立てんと英米の兩大國間盟して亞非利加探檢の大擧をなすべしとの大方策を指出せり森丹介は固より大膽不敵の性質なれば此方策を倫敦ディリ、テリグラム新聞社に申出だせり其の要旨は

世界の中、國語を同うする二大開明國に於て列國に率先し中央亞非利加の茫々たる樣刺を開き以て蠻民を開化に導くの義擧を遂げ兼ねて忌むべく厭ふべき奴隷賣買の源を塞ぎ根を絶つべし而して之を爲すには此兩國人民が協同して遂行せんこと最も望ましき所なり

と云ふに在り此方策は忽ち賛成を得てテリグラム新聞社より米國紐育なるペクルド社主幹ベンヂットへ向け、此擧を賛成して再び森丹介を亞非利加に派遣すべきやとの電報を發せしに時を移さず「喜で賛成する旨」の回答ありて後に兩盟の議も決定したれば森丹介は直ちに米國に赴きべ

ンチットを始め知友の人々に吸色をなして英國に引返し
夫々出發の準備に取掛れり
蘇丹令が首途に先だつ數日、ディリィ、テリグラム紙は今度
米國の紐育へクルド新聞社と同盟して探檢隊を亞非利加
に派遣するとし蘇丹令を擧げて之が司令長となしたる
趣を紙上に廣告せり其の要旨は
此擧の主眼たる故李備克斯頓が半途にして遂げ得ざり
し事業を完結するに在り船ふべくんば中央亞非利加に
於ける地理其他の問題を解釋し奴隷賣買の本部を追究
するにあり……、
蓋し英國探檢家の跡を米國新聞社の通信員が索出せ
るより考ふるも此兩國共同の利益ハ亞非利加の暗黑地

方を開發するに在るを知るべし而して今探檢隊の司令
長たる蘇丹令は亞非利加大陸の旅行には十分の經驗あ
り部下を統べ土蠻に接する恩威並び行ハる此人にして
此任に當るからは此一擧は學問の爲めに仁徳の爲めに
開明の爲めに偉功を奏すべしと期せらるゝなり
此の廣告の世間に知れ亘るや一時人心を傾動し到る處と
して亞非利加探檢と蘇丹令の名とを口にせざる者なき程
なれば西より東より乗ひて書を蘇丹令の許に寄せ隨行せ
んと望む者引も切らず其の中には將官あり佐官あり閣官
あり船長もあれば運轉手、機關手もあり商人もあり職人も
あり牧師あるかと思へば料理人あり或ひは睡眠術を行ふ
と云ふ魔法師或ひは神託を下すと稱ふる所謂家、其の類

とそ千差万別なれ亞非利加探檢に熱心なりと云ふに至りては孰れも限る處なく大抵い同陸を旅行するに必須なる事情に精しき人々にて中には氣候地質にも十分慣熟せりと稱する者さへありけり、殊に祈禱家は神明に願りて戰の勝敗、邪の吉凶を豫知せべしと申込み魔法師は土蠻が妨害を試むる時に當り法術を以て之を悉驅せしめ惑のまゝの騷動をあさしむべしと述るなど思ひ〳〵に己が特技所長を書列ねたる信書は机の上に堆く其の數千二百通の多に上れり左れど蘇丹合が率ね行くべく探檢隊の費力は固より斯る無數の所望者に對して滿足を與ふべきにあらず蘇丹合人に語て曰く

若し黄金だに支出の道わらば予は能く五千の英人、五千の米人、二千の佛人、二千の獨人、五百の伊人、二百五十の瑞人、二百の白人、五十の西人、五人の希人合して一萬五千餘の歐洲人を中央阿非利加に引率し往くべしと、

左れど今は斯る大業を企つること能はねば蘇丹合は多數なる所望者の中よりフクンシス、ジロオンのエドワード、ボコッシのフレドリック、バルカアと喚へる三名の壯士を選拔したりジロオンとボコッシとは河船の航運に慣れて身体も極めて壯健の者なるがバルカアは成る旅館の主管にして、艱難に堪ゆべしとも思はれねど亞非利加探檢には非常の熱心にて蘇丹合が第一回の探檢の際に嘗嘗したる苦實を聞けて前途の艱苦と危險とを物語り恐ろに止めたれども毫も隨行の意を回さゝ只管掲盧して休ざるにゞ覺に作ふ

事とせり此三名の隨行者は何れ劣らぬ忠實人にて如何なる艱難に遇ても落膽したることなく何時も機嫌よく職務に從ひ活潑に立働き一度も疲容しき体を見せし事なければ流石蘇氣の蘇丹令も抽服して亞非利加の内地に入りたる後も此三名を選抜きたるを悔ゐたることはあらざりしとぞ

蘇丹令は英國に於てなすべき準備の最早夫々整ひければイザベて倫敦を出發し直ちにザンジバル嶋に赴き此にて探檢に必要なる別度の用意をなしけり其携らす荷物は前回の經驗もあれば土蠻の好むべき品物を撰びて矢張り羅紗、金巾、太き真鍮の針線、大きやかなるガラスの頸飾り其他粗食彈藥の類ひなりけり此等の品々を分ちて一箇を六十封度の荷目に荷造したるに總量の重さ八噸に及べるにそ之を運搬せんとするには三百の人夫を要せり偖も蘇丹令は總べての準備全く整頓しければ從兵人夫等を雇入れてバカモロヲ港に渡り此處にて鈔號をなし總員すべて三百五十六人此の内蘇丹令と隨行者三名の外は皆な亞拉比亞人若くは土人にして婦女兒童も打交り一行何れも元氣よく内地を投して發程したり是れ實に千八百七十四年十一月十七日の事なりとす

發程後數日の間は地形も左なで險惡ならぬ天氣晴朗にして準候も甚しき急變なければ是は愉快なる旅行なりと何れも笑ひ興じつゝ勇立ちて進みける殊に前回一たび經たる道にしあれば人々土地の樣内を諳んじ居るを以てボン

〜路も拂りて一日も無疵の御面をなすことなくコーヒ
ーまで進み入りけり

一行の此地に進せしより雖雨降雪りて小厳もなければ只
得此に駐屯して數日を過しけるに其うち迫々食物の欠乏を
告ぐるに至り土地に就て買はんとすれども此邊は食用に
充るもの最も少なき土地なるにそ被れ等へ無情にも賣る
物なしとて需に應せも機と餓渇に迫りしかば蘇丹介は四
十名の壯夫を選びて先發せしめ次の部落に赴きて幸くも
少許りの食物を求めて機に餓を支へ夫より例の沼澤を沙
りけるに左しも壯健なるエドワードポコックも瘧病に
中りて歩行すること能はをれと此邊りは一面の低地に
て駐るべき場處なければ釣床の上に臥さして徐々攪ひ進

みたるに遂にクウィに於て死去したり羅丹介はバカモウを離れてより未だ四百英里も進まざるに早くも其の使腕と仲みたるボコッッを喪ひければ大方ならぬ力を落し其が遺骸を曳く跡悲ろに吊ひけり

此邊より土蠻の敵意を顯はすと益々激しく樹の陰け林の裡などより矢を放ち銃を發して一行を惱し暴行を加へんとすること日に幾回なるを知らぬ程なれど此等は少數の土蠻が悪戯を爲すに過ぎざれば彼れ等の爲すに任しけるがイコルーの南部なるウィンヤタに到るに及び始めて多數團結したる土蠻の襲撃に遇へり此日は迷日の降雨潮く時れて稍れの好天氣なりしかば雨水に濕りし荷物を放きて日光に曝し居たるを彼等は早くも望見し猛に食欲の心を

起しけん大祭して之を刼掠せんとい謀れるなり

元來蘇丹介が地位たるや孤軍深く蠻地に進入せるなれば成るべく平和を保つを得策とし敵對を不利となすにぞ土蠻の凌辱を被むるも忍び得らるゝたけは進へ忍び從兵人夫等が屯營を離れて彼等の暴行に過ひ負傷するも進行の途上矢を放ち銃けらるゝも唯これを避け之を防ぐに止り敢て手向をあさゝりしが此地にては土蠻の形勢頗る脆弱なれば平和の手段もて能く安全を保ち得らるべしと思へれも彼等は大膽にも屯營を距る數町の處に於て從兵二名を撲殺し勢に乘じて侵寇せんとする皆心已に明かなればこの蘇丹介も今は是非なしと從兵を指揮して適宜に配置し靜に敵の來るを待ちうけり土蠻等ハ敵に備へのあるを見れとも衆を頼みに些とも擬議せず蠻地に競ひ來るを十分近く誘引寄せ時分はよしと合を下せば心得たりと一齊に銃口を揃へ切て發ちし音の下に忽ち十餘名を打倒せしかば殘る者ともは之に驚き恐れ列を亂して逃散りたりなれど彼等が慓悍なる性質は此の驚きを打消しけん再び備を立直し屯營を奪ひ來るを銃器の鋭利と蘇丹介が方略の巧かりしとに因り遂に撃却くることを得たり

ツンジバル島にて歴入れたるツアンツァヤ種の土人は久しく歐羅巴の商賈と雜居し平和に慣れ殺伐の風なければ今猛獰なる土蠻が怪しき酋を戴しつゝ裸体のまゝにて鵜ひかゝる丸に等しき体を見て大に畏怖の念を懷き逡巡するのみにて物の用に立さりしも蘇丹介が嚴肅なる號

命に酒はされて機に潰走せさりしなり左れとも怯懦なる此種の土人も屢々接戰するに隨ひ後には殺伐の事、危險の地に慣れて復た畏縮することなく惜く戰ふ老兵とハなれり、此役に探檢隊の殺傷せられし者二十四名に及び病の爲に起つ能はざる者二十五名あり剩さへ人夫の多數は食物の不足なるが上に土蠻との接戰にて過度の疲困を忍びたるより其力衰へて復た從來の荷物をば負擔するに堪へざるにそ己を得ず荷物の幾分を焼棄て又は放棄して此の地を立去る事としたり斯る景狀なれば一行の同勢も稀く減員し歐人三名、土人二百名、女子二十名、兒童六名とはなれり

コスンマ及びユーカヤンビイよりアバッディまでの道路

は凱る平夷なりければ隨ひて行程も窟外に抄取りたり此地方は一体に豊饒にして食料に富み土蠻も至て柔順なれば交易なども極めて懇切に取引するにそ利益を得ることゝ思た多し、コーヶウヶにては牛一頭を木綿四十八ヤード と交換したるに此地にては僅に六ヤードを以て足れりとし羊は十二ヤードを要せしも此處は二ヤードにて易得らる北の相逕の者しきには何れも一驚を喫せざるはなかりし此地を出發せんとするに臨み土蠻等は別を惜みて數里の外に送り來り懇に離情を告げ後の來遊を約して立去りぬ猟丹分が言ふ所に據れば是れ迄での道路は大抵蔚蒼たる森林の中にわらされば荊棘茂き藪澤の間を潜り究ら一隊の嚮導が接處を求めて旅行するが如くなりしも此地に

至りて始めて打開けたる曠野に出て軟草の青々として滴
日絲波の慈潤たるに似たれば此を見たる時の心地は實に
快暢言ふべからざるものありしと

二月二十七日ウィクトリヤ、ニヤンザと云へる大湖に越せ
り一行は湖濱なるカゲヒに屯して長途の疲勞を休めしが
蘇丹令い直ちに此の湖上を巡航して精細の測量をなさん
とて其の準備に掛れり蓋し此湖い地理上大だ須要のもの
なれども幅員極めて廣大なればスペークの如き準備完新
頓の如きも只此湖の一部を概測して圖を製せしに過ぎも
未だ其の全形を究めたるものなければ偖てそ蘇丹令い此
の巡航を思ひ立ちたるなれ
去る程に蘇丹令い湖上を巡航すべき第一の準備として英

國より解放ちて齎らしたる鋼鐵製の小舟レイディ、アリス
號を組立けり此一艘の小舟に一行の人飲悉く乘込ひとい
ふは迚も爲し得べきにあらざれば其の中より屈强の者を
選みて伴行くに決したるも愛に一つの困難と云ふは隨從
の土人等孰れも水に慣れ陸地にありての働きは如何な
る勞をも辭せざれど水上に出ては羸弱せる老人にも劣り
て舟を漕ぐ術、帆を揚くる術を知る者なければ僅一人として
乘船を望む者なし蘇丹令は衆を集めて
予に從ひ湖上を巡航せん者には重賞を與ふべし、
と叫びて勵したれども互に顏を見合せて尻込みするのみ
我こそ身を挺で從ひ行んと答ふる者なし流石の蘇丹令も
此れには大に困じ果て一人々々に就き温言を用ゐて勸め

しかど水面の渺茫たるを見ては心慄し身体萎縮みて船中の働き思も寄らぬと皆な抛棄して臥せるにぞ今い只僅に強迫的手段に出で一行の中に就き膂力強く体軀健かなる壯漢十一名を選抜し否應言はさぬ水夫となしけるも之を拒むには至らざりし

斯く跑行の水夫も定まりければ蘇丹命はジオ■ン及びバルガアに精しく別命をなして殘留る者共の指揮監督を托し翌日の朝未明、順風に帆を孕せ千八百七十五年三月八日の朝未明、順風に帆を孕せてカビィの岸邊を開帆し湖面を望んで進行せり元來此一行が屯在せるカゲヒと云へる地はスペーク湾の南西端に位しあれば蘇丹命は周廻巡航の目的にて先づ東方に向ひて針路を取たり開帆の後未だ數時間を經ざるに忽ち暴風吹起りて波濤船体を破碎するにぞ只さへ經驗なく水夫の沿々たるを見て只管に畏怖し居たる新水夫等の傲慢怒はに膽を消し皆な舟底に打臥して物の用に立べくもあらざれど蘇丹命と舵手とは更に恐るゝ色もなく防禦の術を盡しけるに幾くならずして風收り波平かになりにけり(此地方の風は急に吹き來りて急に風ぐを常とす)

整頓レエエーコー河口に達せり此河は其の流れ三百英里にしてナイル河の南端に出づ此れに因りて蘇丹命はナイル河の長さを測定して四千二百英里となせり今日に在りて地理上此河を以て世界第二の長河とするは此測定に基けり

レイディ、アリス號は夫よりスペーク湾に沿ひて進むはど

に米の湖中に突出せるユクレツィと稱する地は半島にあらきして全く大陸と離れたる孤島なることを確認せり蘇丹今の一行は此島に上陸せんとしたりしに蹈なくもヒポポタ（河又は湖に住める猛獸にして軀の長さ一丈七尺もあり）の群をなして突出し何れも盆に似たる口を開き鋭の如き牙を露し一行目被けて襲來る其の勢ひ猛烈にして當るべくもあらねば辛くも舟を漕開きて湖上遠かに逃ぐるを得たり其後アリス號の岸に沿ひて航行する際もヒポポタの淺瀬に出て、睡れるを知らで其が躰軀の上に乘懸けあわや覆へされんとしたるを水夫に指揮し手疾く其處を漕拔けて漸に難を免れし事あり又キレヤと云ふ島にては圍らでも鰐の一群が幽接せるを撥破して其の怒りに觸れ

殆ど危地に臨みしかど率にして鰐の腹中の物とはならざりき、其はか太く長き種々の蛇ども舟の進むに從ひ陸上より水中に跳込むは其の數幾百疋といふを知らで又或る島に上陸したるに一の蛇巣を見たるが其の中に五十八箇の大卵ありたり然れども好で蛇の卵を喰ふ動物あるが故に此種の蛇のみ獨り繁殖するには至らで

此邊にて蘇丹今の敵たるものゝ獨り猛獸毒蛇のみならで土蠻の邪惡なる猛獸に劣らざるもの往々あり此地方の土蠻は他の部落の粗朴なるには似で猟智に富み險險測られざるもの多く陽に慇懃を表して之を誘ひ俄に起りて攻撃するは彼れ等の慣手なり此湖邊に棲む土蠻の酋官に何等の手段を以てするもソハ問ふに及はで唯だ敵を殺せ」と云

へり以て其の殺忍なるを推知すべし

蘇丹合が乗れるレィディ、アリス號は例の如く岸に沿ひて湖面を航行しけるに一群の土蠻あり岸邊に立て舟を呼留め果實又は穀物の類を示して交易を乞むの狀をなしけるにぞ蘇丹合は水夫に命じて舟を其の處に寄せんとせしに彼等は水際なる草叢深き處に伏兵を置き僅頃近くなるを「ソレ」と合圖をなしければ岸上より雨の如くに矢を放ち射竦めて貨物を劫奪せんとせり斯る計略に遇ひしことは一回にして足らざれば舟中にも自ら用意あり早くも彼等の毒矢を避けて湖上遠く漕去れり或る時ハ木造りの小船數隻に打乗りて突然圍内より現れ出で先に進みし小舟の中には毒弩を掲げて交易せんとの意を表しつ　漕き來

り矢庭にアリス號の四方を圍み既に手中の物と思へば忽ち平和の假裝を脱ぎて貪欲の本色を顯ハし始めハ無法の交易をなさんと迫り次には手に觸れる物を掴みて己れの舟へ投込むなど暴慢を加ふれと成るべくは穏和に事を納めんと氣を呑み怒りを抑へて抵抗を爲さゝるにぞ彼れ等は一行の忍耐を見て怯懦爲すなきものと侮り勢に乗じて舟中の物品を横奪し盡さんとするに至る蘇丹合も隙抑の能く彼等が貪慾を過るに足らざるを覺りては其が携帶の速發銃、忽然として活動を始め看る間に數人を撃倒して二三の蠻舟を空うす殘る土蠻は之を見て別算措く處を知らぬ間にアリス號は早くも滿帆風を追ふて遥遥數町の處まで在り此類の變に遇へるは實に一群に止まらず道は何れ

もーヤンヶ湖の北部なるソブマ近傍の邪なりき

既にしてコーカンダ國の境に入りたり此國は部落にはあらで率ろ一大王國と稱すべし其領土は此湖の北岸を抱括し版圖極めて廣大なれば中央亞非利加の部族は直接と間接との區別こそあれ大抵此國の支配を仰がぬはなし今蘇丹合は其に都合よき時節に來合せたるなり數年前スペーンの來りし際には時の君主メテサが極めて暴戾なる時代にてありき王の父スーサは間もなく横虐の君にして伴所三萬人を虐殺したりとの風聞を受けしほどの者なりしが死に臨み其の子カジコンバを以て嗣となす此王も亦狂暴父に劣らざりけるにぞ重臣等議て之を廢し其弟を立つ即ち今世メテサなりメテサは位に即くまでは溫と溫厚の人なりしかと一旦君臨するに及びては俄に其が本質を露はし祝族重臣等を横殺して暴威を振ひ兄と同一の運命に遭ふを避けたり、然るに北後北方より來りたる一人の亞拉比亞人あり王に謁して回教を說きけるに王之に化せられて翻然先非を悔ゐたりけん頗に溫和なる人となり再ひ惨怒に任せて狂暴の行ひを爲さゝるに至れり

メテサ王は他の酋長と異りて遠方より旅人の我が國に來れるを喜び乎厚く之を待遇しければ今蘇丹合が遠く隊羅巴より來りて境内に入りたりと聞き侍臣を派してこれを迎へけり使者は蘇丹合に對ひて言ふやう

王の母一夜夢に白人の湖に浮びて來るを見る、聖朝夢を王に告ぐ、偶ま足下來遊の報あり因りて特に使を派して

迎へ奉ふなりと

蘇丹今は使者と共に陸に上りけるに白人を見んとて陸上に群集せる者塔の如く實に數千の多きに及べり蘇丹今が使者に導かれて此方へ來るを見るより兵隊は各々銃器を執りて二列となり一齊に發射して脫砲に換へ此と同時に鼓を拍ち旗を揮ひて喜の意を表せり、繼て此國の等相とも覺しき者數名の官吏を隨へて出來り蘇丹今を迎へ慇懃に禮を施せり、奇を好ひは何れの國も變らぬ人情なれば接待の官吏等へ競ひて種々の問を起し彼れ一句此れ一句殆と應接に迫あらを盡し此ニューガンダ國にては白人は孰れも博識にて何事をも知らざるなしと信じ居るが故なり

斯くて蘇丹今到着の旨をカバカ(王の事を云ふ)に奏し、今般來れる白人は極めて博識ありと告げるに王は大に喜び乎を撫して滿足の意を表しける体は宛ら價貴き珠玉寶貝にても獲たるか如くなりしとぞ夫より蘇丹今は珍饌美酒を列ねたる饗應を受け了り頃て王室の官吏に先導せられて國王に謁見したり王は此時恰も狩に出て、狩小舍に在せしかば蘇丹今へ其前に至りて敬禮を施しける王も進んで握手の禮をなし其が傍らに坐を與へられけるにぞ恐々王の相貌を觀るに身長く眼圓く痩枯にして面色赤黑く如何にも神經質とは見ゆれども其の言語動作に沈着たる處あり決してスペータが記せるものと同じからを中々に成傑もあり才智もある君主なりとは一見して推測られぬ

蘇丹今がニューガンダ王の離宮に滯在中王は白人の射的術

を見たしと所望せられたり是ハ後宮の婦人に見物せしめんが爲めなりけり蘇丹今は快く之を承諾し偖何をかなと四辺を見廻すに恰も好し二百ヤードを隔て、一尾の小鯨が睡れるを認見したればこれぞ屈強の獲物とさんなれと小銃右手に携るより早く突と身を起して北方に向へば王を始め列坐る人々の視線は悉く蘇丹今の一身に注げり此の時蘇丹今の心頭に浸したる観念を其の紀行中に形容して云く

遣は億萬の白哲人種を代表するなれば其の責任極めて重大なり、

と心中に上帝を祈念しつ、百ヤードを詐り進み狙ひを定めて銃を放つに過たず鯨の頭に中りて斃とばかりに射貫きければ喝采の聲雷しは鳴も静らぬ後に白人が射術に巧なるの明証を示して一層の敬意を増さしめたり此時殺射したる鯨九ハ三オンスのものなりし

繰て王はリーバルカアの都に歸られけるが蘇丹今をば國賓の待遇となして作へり王都に到着したる後幾くもなくして著名なるオルトン將軍の部下の佐官なる佛人ドナントと云ふ者蘇丹人二名と共に此地に來りけり斯る深奥の僻地に於て偶然にも二個の白人相會したる事なれば蘇丹今とドナントとは一見舊識の如く其交情最と親密となりぬ蘇丹今ハ此際の事情を其記錄中に詳記せざれどドナントが遊したる紀行の中には詳に之を叙しあり其の紀中に、

蘇丹今は快活なる性にて又友誼に厚き人物なり之と語

りて予が旅行の疲勞を忘れたるのみならず幾と郷里に還りたるの思あらき云々

との語を敍せたりナントは其後歸路にて発し紀行のみ世に公にてそへなりにけり

蘇丹命はコーガンダ國に於て俊逸なる待遇を受け樂き日を送るにつけカゲとに發せし一行の如何に己れの身を案じて歸り來るを待、詫び居るらんと其事のみ心に懸れば竟に國王に暇を告げ且護衛の兵を假らん事を請ひけるに王い其の請を容れ一隊の親兵を授して其の屯處まで送還すべしと命じけるにぞ蘇丹命の一行は此護衛兵と共にリーパルカアの都を出發して歸途に就きけり是れ四月十七日の事なり

護衛兵の隊長は王命に因り只得き蘇丹命の一行に附隨して都を發したれど氷き湖上の旅行を好まざるにぞ兎角遲々緩々とし種々の辭を設けて空しく日を延し蘇丹命が百方辭を盡して懇請すれどもはかゞしき答さへあさゝるより或は温言を以て苦に之を諭し或は威を示して之を脅したれども更に其の効なかりしかば蘇丹命も今は詮方なしと覺に護衛兵を打捨て、獨りアリス號のみ開帆したり

是れよりカゲとの屯處まで歸着する間の危難い初めにも勝して甚し日數を經るに隨ひ貯への食料既に竭きて一行饑渴に迫りしかば舟を湖の四岸あるプンビルヤ船に寄せ土産の物價は計り難けれど恐びて懇切に求めたらんには些との食料を得る事もあるべしとて舟を北方へ進めける

に臥上には早くも一群れの土盤山で來れり其の狀態と平和に見なけるにぞ心を寛めて岸邊に漕寄せ今や舳艫の險地に觸れんとするを見るより其處此處に潛伏し居たる二百あまりの土盤バク〳〵と跳出で物をも言はず手を舟側に掛くるよと見る間もなくアリス號を搶挽してズル〳〵と十間許りも陸上に引上けて四方より押取圍み撲倒さんと脱ひ寛れり蘇丹介は兩手に短銃を執りてスックと立上り寄らば放んと身構へたり此時水夫等は抗し難しと覺悟しけん敵意を露はさず何れも勉めて平氣なる顏色を裝ひ故らに微笑を帶び靜りかへつて居たりしが中にもバタカアと云へるは火の燃もるが如く喋り立つ土盤に向ひ決して敵對する者にあらねば靜にせよ手向ひするなと諭しけるに一時は鳴を鎭めて沈寂したるにぞ水夫ハ舟を出で其の好意を得るに努めける折柄新たに一群の盤人押寄せ來り凶暴の所爲に及はんと弄きけるを水夫ハ面を和げて頻りに之を慰諭したれど彼等ハ更らに頓着せずガヤ〳〵と騷りながらに立寛うて早くも一人の水夫を搶倒し他の一人を棍棒にて打撲り他の一人を倉にて突き唯一揉みに揉出さんとぞ競ひける蘇丹介は此体を見て再び短銃を執り舟中に立上り其が中の酋長とも覺しき者に對ひて制止を求め尙は舟中にある花布、頭飾りを投出して彼れ等の拾ふに任せ盤人の氣を慰めけるに酋長も漸く制止するを肯んじけん群衆の狼藉を制して後に一場の評議を開けり此等の土盤は少しく亞耶の事件あるときは必ら之衆を會して評

隱をなすを常とせり

左しも猛りし土蠻等もアリス號の中に在るものは人と品とを問はす既に夢中に握りたる貨物なれば急ぎて横奪するに及はさと雖へけん攻撃を見合すに決したるが尚は逃去る事もやとの懸念より種を蔭去りて側の岡に集り如何に處置すべきとの評議を凝せり此時渚しも遲疑して機會を失はゝ一行の運命ハ彼等の判決する所となり了らんとするにぞ蘇丹命ハ例の果斷なる策を取り水夫に向ひ其の號令を待ち直に飛出して舟を水上に推出すべしと命じ更に一人の水夫に贈物を持たせて會議の場處に到らしめ敵の油斷を見澄し「今」と一聲發するや水夫一同地上に踊出で力を極めて舟を推す此時贈物を持行ける水夫に「遁れ」と招

押しければ件の水夫は一散に走還れり、蠻人は期と見るより一齊に蹶起して追來れる勢ひ太た逼迫なり蘇丹命は乎中の短銃上ぐると共に真先に進める土蠻を一發の下に斃倒す此間に水夫殘らず舟に取付きアリス號を把て水面に放出したり敵が岸邊に來れる時には早くも舟ハ陸を離る、五六間の處にあり蠻人等ハ幸中の珠を失ひし如く水に飛入り追迫らんと分野なれば蘇丹命は號令を下し軍銃の火門揃へて撃ち打ち鳴く間にパタ〳〵と七八人雖倒しける程に流石兇暴の野蠻人も左右なくハ泳ぎ近附き得ざるにぞ一行ハ幸くも虎口を脱れ湖上遠に漕去りてホッと一息吻く間もなく遠と亘大なる二頭のヒポポタマスを開き砲を鳴らしてアリス號に迫來れり乘組の水夫等はアナヤ

とばかり眺を消し如何はせんと狼狽すれと物に動せぬ蘇丹合は更に驚する色もなく例の連發銃右手に執り白浪と
して舵頭に立ちて北が舟近く來るを待ち件の猛獸が五間
はどの處まで進み來れるを見てズドンと一發放ちけるに
狙ひ違はず先きに進みし一頭の眉間へ發矢と打中てたれ
ば群獸の如き群を離して拝れき苦しみ忽ち水底に沈めり
續きて來る一頭をも亦た一發の下に打沈め續に危難を免
れたり

斯る障碍に出遇ひて恐しく時間を失へるが上に樞を土蠻
に横奪せられければ舟の進行甚と遲くて遠く去ること能
はず徒らに順風の吹き出るを待ちけるうちビンゴルが島
の野蠻人等は那處よりか數隻の木舟を取出し來り之に多

勢乘込みつゝアッス號目懸けて追駕け來れり此方は風な
く柁なくて舟足最も遲く沼る〳〵蠻人等に取圍れんとす
る体なれば蘇丹合は心頻りに焦燥ち舷ら底板を剝取りて
水失に與へ一行力を戰せて脱去らんと足搦れども意の如
くに捗らず見角うする間に敵の舟は既に間近に迫りけれ
ば今は舟を漕ぐを止め各々銃を執り能替へ々々々々出べ筒
けて打窮めしかば前に進める二三艘は舟中を人を留め
す主なきまゝに波に搖れて那方遠方に漂へり其の他の舟
にも敵偽太だ多かりければ慓悍猛獰の土蠻等も再度の手
並に心臓し唯だ遠方より遠矢を飛すのみ復た追迫らんと
もなさゝれば先づ一難は逃れたれども舟中既に食盡きて
餘す所は唯四箇の芭蕉實あるのみ斯る些少の食料にて間

頭なる十二名の壯夫が餌を嚙するに足るべくもあらぬ若し順風を得たらんには二昼夜にてカツヒの屯處に歸着するを得れども不幸にして逆風ならんか一ヶ月を費すも発て東なし前に飢あり後に敵あり進退縮に谷りてまた如何ともする能わぬ風あれば帆を揚げ風凪げば舟板もて水を掻き只運命を天に任せて力の續かん限り漕ぎけるも固より不完全の器械なるがうへ何れも腹中物なく力出ねば一時間に一英里をも進まぬ蘇丹介が群を被けて動かせば一同奮て氣力を出し進行を快速にすれど饑渴を忍びて寒夜事に從ふなれば吾も人も疲勞極りて意は矢猛に逸れども力及はぬ果ては波のまに〳〵漂ふに任せたり近き物りに陸地もやあると四邊遠に眺むれども漫々たる水と漠々たる霧との外い眼に遮ぎるものとていなく其の際涯を見ざりけり斯く湖上を漂蕩すること七十六時間三日三夜餘にして一の無人島を見出しければ一行い暗夜に燈を得たる心地しつ直ちに舟を岸に寄せて上陸なし夫々に手を分けて木の枝、枯草の類ひを集めて火を焚くもあれば渡禁深く分往きて野菜果物を探るもあり蘇丹介は此時の狀を描寫して云へり

予は銃を携へて坡上を徘徊したるに野鴨の群れ居るに遇ひ未だ半時ならぬ數羽を獲たる處へ水夫等も亦た芋蕷實と覆盆子とを摘取り來り直ちに之を調理して且つ語り且つ食ひ各々腹を皷す數日食はぬ波に任せて漂蕩せるもの今此美味に飽く此夕火を圍ぬ團欒せる愉快は

得て形容すべからず云々

翌日再び舟に乗りて歸途に上る率に順風なりしかば其の日の中にカゲヒの屯營に着くを得たり

カゲヒの屯處に殘れる人々ハレイディ、アリス號が湖上探檢として開帆したるより久しく歸ら屯風の音耗も聞ねざりしが側々土蠻の中にアリス號覆沒の說を傳ふる者あり しかば驚れも其が安危を計り顧ね胸を痛めてありければ今や遙に其の帆影を認めて誰れか欣び勇まざらん舟の岸邊に近つくや一齊に銃を放ちて脫意を表し數十の壯漢爭て水中に飛込み矢庭に蘇丹介を舟より出して打に昇き各々其が手足に取附き歡びの聲を揚げて屯營の周圍を驅廻れり蘇丹介はジロオンが喜の色を面に溢らして出迎ふる

を見れどもパルカアの姿見ねざるにぞ

ジロオンよパルカアは何處に在りや、

と問ひけるにジロオンは忽ち悲然として悲哀を帶び側ちの土饅頭を指し

彼れは病死して既に十二日を過ぎたり、其の遺骸い彼處に埋めたり、

と答へしかば蘇丹介は又もや一驚を失へる思ひして深く其の死を惜み發ね悲を歎たゝきけり

蘇丹介はカゲヒの屯營を撤して悉く一行を率ゐ再びコーガンダ王國に至らんとの念あれば此より程近き部落なるコークレウィの酋長に七百弗許りの價ある報酬を與へて數十隻の木舟を借受け一行を之に分ち乘せて出發したる

に其の中の二三艘は既に朽腐しありけるにぞ出發の夜は
くも沈沒したれと乘込み水夫等は辛く救ふことを得たり
道度の航行にも前回災難を被り機に身を脱したるブンに
ルチに至れる時、土蠻は數部落を糾合して邀擊ちけれども
一行は蘇丹令の指揮號令に遵依して遂日善く之と戰ひけ
れば難なく擊て却けたり是より後は左せる危地に臨まも
事なくユーガンダの國境に入りたり
此時ユーガンダ國へ蘇丹令が前回巡航の歸途に於てアル
ス號を押奪せられんとしたる夫のウアブマ部と戰を開き
居りしが交戰中は旅人の他行を許さゝるは中央亞非利加
の習慣なるにぞ一行も夫れが爲め戰の終るまでは何處に
も去る能はを抑留せらるゝ事とはなりぬ

蘇丹令がユーガンダ國の事を記する深く之を稱揚せり其官に
亞非利加の人種風俗の完全なるを觀んと欲する者は亦
道直下の地方に遊ばざるべからを打開けたる沃野千里
地味肥沃にて滿目青々たり、植物の發育速かなる驚くべ
く、芭蕉繁茂して幹枝葉實の倦火なる物の比すべきなし
食物既に豊富あれば土人の氣風も自ら優長にて此處彼
處の樹陰に安坐して涼を納る、など遊化ハ微笑を帶び
人も亦共に微笑するもの、如く北の邊樂の狀之をエー
デンの神園と稱するも可なるべしされば此邊の土人は
眼光清々しく神經の顯敏を顯ハし体格ハ肉肥へ骨太く
色ハ淡々と滑かに唐銅の如く如何にも壯健に見ゆ之を
他の部落の矮陋にして汚穢なる者に比ぶれば同一の人

種とは思はれぬ殊に智識能力も普通の黒奴には太だ優りて遙離をも辨へ居り裸体にて徘徊する者なく皆眞色の褌潤き服を着せり、其が家の周圍にハ畑を有し豆、落花生、珈琲、烟草、の類を植ゑ畑の四周には無花果、芭蕉など繁茂し如何にも乎人行屆きて開化國の農家に異らず、各村に其有の原野ありて牛、山羊等を飼育す、家は概から大抵二室に分ちあれども清楚にして日常必需の器具も備はりあり、其他に附屬の小舍ありて一ハ神を祭り他は婦女が裁縫などの業を執る處とす、其の食物飲料にも珍しきものあれども特に奇なるは芭蕉の實を絞りて汁を取り之を醗醸して飲料となすものなり是れは香氣強くして次た口に適せり

婦女の容姿は他の黒女より幾分か上等なれども歐洲人の眼に留るほどの者を見ず國王メッサは中央亞非利加の要部を領し居れば其中より選拔して後宮に充る者其の數五千人に及べり其の中宮女と稱するは五百名にて餘ハ使令に供する趣きなり予ハ密に宮女を觀るを得たるが眼を注ぐに足るは僅に二十名に上らず中に就き秀麗とも云ふべきは三名に過ぎざりき此三名ハマッコヤ種なることと疑ひなく黒白雜種の色にて鼻陥く唇薄く眼大なり唯惜むらくハ其の頭髮の縮れて短く黒人種固有のものたるだけが難すべき所とす此三名の佳人は他の鼻低く唇厚く肉肥へたる黒女と能を審ふ能はず特に國王の愛幸を受くることなし云々

メナッサ王は國力を振ふて大船せんには一萬六千より二萬迄の兵を出すを得れども敵は孤島に據れる一小民なりと侮り一戰に之を征伏せんとしたれともウアプマ部の種族は懼怖慄く敵ふ脆兵なれば盛き勢にて之を防き麟々ュー

ガンダ國の征討軍を敗りけりメナッサ王は我が軍の敗績すること數回なるを聞て大に怒り其將師に「若し再び敗報を奏するに至らば生ながらに燒殺すべし」との嚴命を下したれども其甲裝なく僅か百艘の小舟に乘れる小敵の爲めに脆くも全軍を覆へされぬ

蘇丹令は此の敗ひに就き利害の相關する所はなけれども變戰久しきに彌る時は一行の困拠を出る能はざるにそ迚に和睦を結ばん事を切望せる餘り百方工夫を凝して遂に一策を案じ之を王に獻したるに王大に其の計略を嘉して蘇丹令が青衿に從ひ二千人の工夫を授けたり蘇丹令は件の人夫を督して數艘の小舟を聯結せしめ其の上に木材を以て大なる櫓を組立て一種奇異の浮臺場を造れり其形は細長くして高さ七丈、幅二丈七尺あり其の中に二百の兵を載せて敵岸近く漕寄せけるに敵兵は之を見て如何なる怪物のあるやを知られば驚くこと大方ならそ痛く膽を冷せる折柄浮臺場は早くも迚で岸を距る二十五間許りの處に至り進行を止め臺場の底より怪しき聲を揚げて

迚に降伏せよ然らずば盆島を破碎すべし迚ふて殺伐すな、

と呼はりけり流石勇敢のウアプマ人も斯る非大なる怪

見を見たることなければ大に長懼の心を生じけん酋長は衆を集めて且く評議を遂げたる後岸頭に立出で

我々は王の命に從ひ貢物を納るべし敵命は茲に終れり、と大呼せしにぞ徐々浮瀛場を漕戻して覓に和蘭の岡を指べり

蘇丹命は最より深く國王の信憑を得たりしかば耶蘇教の勢ふべきを說きバイブルを出して其の大意を懇に講じけるに王之を喜び諸國語に譯りたる上回教を捨て耶蘇教に改宗すべしと決せり蘇丹命は此趣きを英米國の新聞社に報じて

若し醫術、農業、工業其他實用の諸科に通ずる宣教師にして此地に來らば有數の上に於て少なからざる効驗あるべし、

と勸告しければ其後國の宣教師の此地に來ることゝはなれり

蘇丹命は新くにして國境外に出るの自由を得たれば此地を去て何も探檢に從事せんと王に暇を告げるに出發に臨みて王の二千の護衛兵を附隨せしめたれども是も前回の如くエーカニージャー湖の邊りまで至りし時此處より先きに往くを欲せずとて强て身の暇を請ひけるにぞ蘇丹命も苦論提嚇の効なきを知れば遂に其の意に任せけり夫より蘇丹命は此湖上をも巡航せんと思立けれども一行の從兵之を好まず異議を唱ふるもの多かりければ其の意を果さずタンガニカ湖に向て進行せり

此の途上カタクウイを過りける時圖らずも彼のアソヤンウイビィの猛將と聞ねしミクンボーに出遇ひ之と語るに及びて深く其の敵愛する所となり遂に兄弟の約を結へり其の儀式は兩人相對ひて坐し小刀もて各々右の脚を刺し出てたる血を交換して互に其の傷口へ注ぎ入る此時其側に侍せる僕從雄を張揚げ

若し一方に於て此將を破るものならば猛獸は之を喰ひ毒蛇は之を嚙み其友の之に背き其銃は營中に裂け死に至るまで諸の辱りを受くへし、

と述べ終れにて式了りければ雙方贈物を取交して袂を分ちぬ

隊列令は英國を去るに臨み敵頭の尖を購ひて遂れ來りしが前後相接で死し幾に生殘りたる一頭も此處に於て陷れたり

五月二十七日一行ゴーシンに達したり山河の景勝は數年前に異ならねど膝を交へ爐を圍みて俱に冒險の條樂を遂行せんと胸懷を披きて談笑したる李備克將軍は既に去て今はた安に在るを坐に四邊を顧盼して轉た今昔の感に堪へず悄然として坡頭に佇立し且しは立もおらざりけり

此地にて再びレイディ、アリス號を組立て、ポンガ、ンカの湖上を巡航せり此の航路にても別に異變にも遇わざりしが地理上、科學上に得たる所少なからず其の調査に據れば

湖の水潮次に其の滿を增すを以て久しからざる間に一方を決壞し世界無比の洪水となりリーヘッカとの間なる

一帶の地方は捕獲し去らるべし云々

此巡航に五十一日を費しコージンに歸營するに及びては病死、逃逃、相繼ぎ一行の人員益々其の數を減じければ勿々に屯營を引拂ひ舟にてポンカニカ湖を横過り方針を西に取りて進行す行くに從ひ奴隸商隊が惨酷殘虐を極めたる痕跡、那邊ちに散在するを見る處々の村落は焼失せて頽垣斷礎を殘し田圃は荒蕪して墓草茫々たり、原野には白骨累々として堆を爲せ是は防戦の際死を致したるにあらざれは老弱用に堪へざして横殺せられしもの、遺物なるべし、吁非日然柴の地、今は無人の境と變ぜ心なき土壁すら尚は恨恨に堪へざるの狀あり況んや多情多血の文明國人とや奴隸商隊は大抵漂泊的の亞拉比亞人より成り立ち巡ぐる所

奴隸を極めて黒奴を捉拿する獅くの如し宜に慎ひべき匪徒と云ふべし

一行は道もなき所を跋渉しつゝ、西へ〳〵と進みけるに圖らずも一大河の岸に達せり是ぞローヴバ河なり蘇丹、今、孝倫克斯頓等が莫大の資金を費し幾多の勞苦を積んで究尋したるは此河に外ならず河の廣さ七百間もあり南より東へ彎曲して流去る、今や千古未發の秘密は發顯して目前に横はれり是よりの嘗此河に沿ひて海に入るを究むるの一事あるのみ蘇丹今が大業も既に過半は成就せりと云ふべし

ルーアンダよりニヤンクウィに到る間に於てウアヒンバと呼ぶ一部落に入たり此種族は黒人中に在りても最も劣

常に異し其が容貌の古怪なるは誠に書くにも描れ難き人か
鼻かを識別るにも苦むばかりなり其背長と呼ばるゝ者の
顔を見るに巧乎なる彫刻家が工夫を凝して製作せる滑稽
的假面に類し其の開きこと言語に絶に飢くして長き歯は
厚くして硬き唇の間より突出して生を終るまで上下相合
ふの期なく鼻は扁平にして形を成さず足は常に露出して
敢ふことなく日夜山野を跋渉するにて皮の堅きこと馬蹄
に異ならず毛髪る肱祝にても彼等は自ら得々の色わりと見
る偏人中の一格は森丹介を指して他の黒人に對ひ是れま
た人と云ふべき歟と叫べり蓋し彼等は世界に白皙人あり
ぎは想像にだも及ばざる所なりしならん斯く劣等の種族
にても婦人は流石に同情相憐ひの感覺の強き者と見に偶

立酷丹介の從者が倒れたる木材に打たれて傷を負へるを
見てアナヤと辭を發して顔色を變へ深く愍む情の其の面
に顯はれぬ
爰に一の疑問あり其の此ロークバ河は卽ちナイグル河な
るか又ハコンゴー河の上流なるかと云ふ一事なり幸備克
斯何、カメロン等が働きに之を解釋せんとしたれと種々の
障碍に遇ひて果さゝりし所なれば森丹介は先人の志を繼
ぎて是非とも之を探究せんと決意しけるも土人の言ふ所
に據れば
此河は決して航下し得べき所にあらず其流ハ北へ〳〵
と注ぎて何百里行くも際涯なし剩さへ兩岸にハ狡猾に
して殘忍なる矮人群居をなし森林の間より絶ねず毒矢

を放つあり、又偉大なる鱗蛇の樹の枝に懸りて人の過ぐるを見れば矢庭に飛散りて害を加ふるあり、又ヨリッと稱ふる人に等しき猴の林中に埋伏し行人を襲ふこと少なからず殊に此河の下流に沿ふて接息する土蠻の「カニバル」に屬し好で人肉を食すれば旅客の無難に過ぎんこと思ひも寄らず左れば是れまで象牙商人若くは奴隷商隊などが流に從ひて下らんと試みたるも屢々あれど何れも中途にて蹉躓し一も目的を遂したる者なし鬼神ならばイザ知らず奴隷常の人間には到底此河を航するを得ず云々

羅丹合は斯の如き話を聞くも更に驚く色なけれど從兵は之を信じて深く畏怖し但に過まんとする者あらず加ふるに例ま其處に居合せたる亞拉比亞人あり左の如き冷評を下して從兵を煽動せり

奴隷を捕へんとか象牙を買はんとか云ふ利益上の目的ならば危險を冒すも猶ほ可なる事なり現に數年前亞拉比亞商隊の此河を下りし事ありしが一行三百名の中生きて還りたるは僅々數名に過ぎざりし左れど道は收利の目的に出でし事にて解せる話しなれど今利益の計算は全くなく唯だ此水は那處に流るゝかを確めんとて掛る大難を冒さんとは合得しかぬる事なり、

損益の外には頭腦に何物をも蓄へざる亞拉比亞人には實に左もあるべきことならん兎もあれ此等の話説は大に從兵の叛離心を惹起し遂ては最と從順に命を聞ける者も

今斯る益なき危險を願はんは不服なりと主張り張ねて他へせんとせば穩かならぬ騷動にも及ひかねまとき撲滅を現はせり

時に此地に來合せたるチップポー、チップと云へる亞拉比亞商隊の隊長あり此者は膽力あり才智あり殊に商隊を引率して內地に入り奴隷を捕拿するに老練の名を得たる富商なり蘇丹令は此種の人物に相助を受くるを屑とせざれども從兵の命に應せざる上は單身獨行にて志を遂ぐべきにあらねば拒けて警護を依頼しけるにチップも初い斯る危難を冒すを好まずとて辭絶したれど覺に香餌に誘はれ五千圓の謝金を受くる約束にて六十日程の間二百人の護衛兵を貸し同行するを肯じけり因りて從來の一行を集めて整列せしめけるに人員追々に減少し今は僅に百六十四人となれり夫れすら衰憊の餘り氣力阻喪し銃を執りて戰はんよりも身を捐して奴隷たるに甘んせんとする者多く事あるに臨みて其に恃みとなるべき兵へ四十人に上らを武器を點檢するに僅は六十五挺の笛銃ありければ之を携帶せしめて愈々ロークバ河航下の途に上れり

チップは渡途の後數日の間は總勢七百餘人を將ねて同伴せしが途中にて二百餘名を他へ分遣し河に沿ひて北行しける程に日を經るに從ひ森林益々蔚鬱となりもて往き小枝は縱橫に繁りて面を向くべきやうなく大枝は蔽ひ重りて宛ら蓋したるが如くなれば野干玉の暗路を辿る心地して咫尺をも辨せを日記を錄せんとすれども如法暗夜に別

ならねば色を分つの便を得せ、樹の葉より滴る露は雨よりも激しく地下は日光の透かされば濕々として泥土脛を没するばかり衣服帽子は濡濕りて乾く間なければ數日ならずして朽腐れ蘇丹介が穿てる靴は十日にて敗壞し復た用ふべからざるに至れり拙く凄しき森林の中を往く事なれば歩々躓もて枝を拔き手に刑を排け足を擧げて泥濘を掘かされは前み難きにぞ一日僅に六英里餘を進行するに過ぎざりけり左れば燧石のマッチも餘りの濕苦に碎易し最早進む能はされバ此より離しまらんと言出てたれど蘇丹介ハ甘言を以て其の男を賞し其の擧を揚げなぞしつ今暫し忍耐すべしと勵しける然らば今後二十日間同伴すべしと約しければ夫より一行を水陸二手に分ち一隊は小舟にて河を下り荷物は舟にて運搬する事とし一隊ハ身を輕くして道路を取りしが困難は日一日に加はり猛烈なる土蠻の林中に出沒して毒矢を放ち行路を遮欄ること屢々なり彼等の射術に巧なるは實に驚くべきものあり一行の者試みに其の弓を執りて射るに何れも三十五間前後より遠くは達せざれど土蠻が發てば能く百間の距離に達す其の鏃には毒を附着しあり若し之に觸れば微傷にても大象を斃すの力あり其の他諸ろの互蛇毒虫は絶ねす群り來りて害を加ふ夫れのみならず瘴癘の氣に中りて痢疾、赤痢、マラリヤ熱など有るとあらゆる病形の發生して患者を出すこと非常に多きも一行の中に醫師なければ徒に用意の藥を與ふるのみにて十分の手當行屆かず隨ひて益々多數となり

果てゝ毛布に包きて河水の中に投ぜる死骸は日々二三に下らぎれども其うち河岸に於て圖らぎも二隻の老舟が漂着しあるを見出しければ之に忍者六十餘名を載せて漕下らすべとしたるに舟中の狀は醜怪極まり實に酸鼻に堪へざるものありけり

森林の稍々盡くる處に至りし時ナップと約束の期日までは尚は八日を餘せど其が率ゐる隊兵の命を拒みて寸歩をも進まざれば此處にて辞したしと切に請ふて止ざるにぞ蘇丹今は陸方なしとて之を許し覺に別るゝに決したるが恰も耶蘇降誕の日に當りければ狀別に臨み事情の許さん限り娯樂を取るべしとて種々の催しをなし一行の中にて强健なる者共い健脚を地らして駈けを競ひ又は壯觀を抑ひて小舟の競漕を爲すなど思ひ〳〵の技を演せしが中に就て殊に目覺しかりしは隊長ナップと生殘りたる一英人ジロオンとの競走なり蘇丹今は嘗し來れる黄金の杯を取出して賞品に懸け勝ちたる者に與へんと告げければ兩人は一と入働みを生じ各々力を揮ひ踵を鼓し一行の環視せる面前に於て三百ヤードの場處を疾走しけるが覺にナップの長脚勝を制したり

蘇丹今が申ねたる部下の從兵は愈々ナップの一隊と狀別するとの云ふを聞きて又もや不平を鳴し俱に辞し去らんと主張りて更に命に從ふべき氣色なくアヘヤ半ば以上成就したる今回探檢の大目的も功を一簣に缺きて空しく水泡に歸し去らんとせり蘇丹今が一刻の浮沈い實に此一挙に

かゞ定まるなれば憤然として部下を集め
今にして引返さば數十日の艱苦を嘗て玆に進したるが
の全く無益に歸するは勿論、斯く中途まで踏出したる上
は往くも遊るも均しく危險と困難とを免かれぬ此の河
に從ひて下らゞ擬海に到らんこと必せり均しく危險な
り何ぞ前に向て目的を遂せざるや、
と演說したるに衆皆な之を然りとせしがはナップに與ふ
る謝金の中二千圓は手形にて任拂ひ其の餘は彈藥、羅紗花
布、金鏈等にて交付し北と南へ別れたり後にて聞けば此頃
拉比亞商隊は歸途に於て甚しき艱難に出遇ひたりとぞ
蘇丹令の一行は前に伏りて水陸並び行けるに此邊りの土
醫には平和なるもの太だ稀れにて行けば行くほど慄悍な

る種族多く幾群れとなく處々に散居せる土蠻が夜となく
從となくオオ、ー、ヒ、ユー、ヒ、ユー又はボー、ボー、オオー、オオー
(肉々)と叫く聲の谷に響きて遠しく宛ら刃もて胸を刺る、
が如き思ひあり、河の同折せる邊、樹の生茂れる邊に至れゞ
不意に起りて雨の如くに矢を飛して一行を惱す事甚なれ
ば二六時中油斷すべき間隙なく人々の耳目い只隊の一方
にのみ注き居りまた他念を生ずるの遑なきゆゑ蘇丹令は
却て從兵の不平と苦情とを聞くの煩を避くるを得たり尤
も此の地方に接息する土蠻は好で人肉を食ふ種族なれば
其の攻撃は重に食料を得んが爲めなりと見ゆ
一行の前に横はる困難い曾に土蠻の抗禦と猛獸の加害と
のみならず河中にては時々壯熊の遊泳に出遇へり水流本

に急流となるかと見れば忽ち數十尺の瀑ありて前に當る遠に漕ぐ手を留むるも舟は急流に迫はれて止らざることを得ざる折には隙しめ荷物と乘組とを卸して舟に綱を附け通過するを例とせしが一月十四日の事なり一隻の小舟急流に捲去れて箭の如くに奔下し漕止る能はもアハヤ瀑底に沈落し了らんとす此時乘組の者死力を出して中流に突起せる岩角に取附き綱を投げて援けを呼ぶにぞ陸上より綱を投與へて漸く岸邊に曳寄せ不思議にも危き命を取留めたり既にして蘇丹令が半備克斯頓瀑と名けたる飛瀑の近傍まで航下しけるに土蠻の攻擊を加ふる益々頻繁となり果ては數部落の蠻人連合して大舉襲ひ來れり敵は五十餘艘の小舟に打乘り四方より攻寄る其の勢ひ甚だ

猛烈なるが中にも最と猛きけるは土蠻中に火器を携へたる者ありて其數二百人にも及ばんかと思はる是なり彼等は怪しき聲を出し弓鐵砲を交へ放ちて漕ぎ來るを此方は都り返て之を迎へ程好き場所に舳寄せスハと被けたる聲に應じて其先きに進める小舟を口懸け一齊に銃を打發せば將棊倒しにバタ〳〵と十名あまり枕を並べて倒れけり敵は此体を見るよりも大に色めき立ち除り近くへ寄附かを唯だ遠攻めになすのみなれば此方に取りては淺からざる利とはなれり一行には一たび此に敗を取れば萬が一にも生路なきにぞ各々氣力の續かん限り死を決して奮取し息をも吻かを揉うだりけり

敵にハ火器ありといふも歐洲にては既に廢物たる舊銃な

れば付の距離を隔つるも彈丸時れて命中せざれば一行の死傷甚だ少なしこれに引換へ我れの拵へたるは何れも新式の後裝銃にて遠きに達して狙ひ狂はぬ銳器なるにそ敵時間の戰に敵の殺傷大だ多かりければ當り難しと思ひけるにや將さに退き去らんとしたり此時一個の勇夫あり一行の殺つ彈丸の雨の如くに注げる中を事ともせず獨りが中より身を挺で乘れる小舟を漕進め幾と二十五六間の處まで寄來り乎にせる銃を執なほし蘇丹介目かけて發射したれと狙狂ひて中らず此方より打放てる彈丸にて其が太腿を打貫れしも更らに動ぜる色氣なく我が兵の目前にて悠々と次を拵き挑口を黙と噛みて徐に舟を漕去りたる其挙動の如何にも勇ましかりければ蘇丹介は從兵を戒め

て之を追撃せざる北の岸り去るに任せたり既にして敵人等は到底勝算なしと斷念めけん圍を解き何處ともなく立去りける是れぞ此河に於ける最大の戰鬪にして第三十六回目の交戰なりとす

北の後は今一回の小競合ありしのみにて人間との戰ひは溯くに止みけるが遊化との爭ひは更に劇しくなり來れり

蓋しロークハ河即ち後に知る公果河は上流に於てこそ幅溯く水深く流も亦た緩かなれ愈下るに隨ひ愈狹く急流となりもて往き河底には突兀たる岩石多く蘇丹介瀑と呼ふ沒よりも忽ちにして巨瀑顛れ忽にして急湍來る、巨岩の河表に突出せるかと見れば奔流渦を卷て衝き去るあり非險惡なる名狀すべからざる此等の障害に遇へば小舟に綱を結

附けて陸に引揚げ大勢にて或は推し或は挽き難所を過ぎれば再び水に放つ其の流れ稍々穏かなる所にては綱を結附けしのみにて之を岸上より引きつゝ徐々と下ることめれど綱絶ちて舟を壊るも屢々なり一行の中にて最大なる長さ七丈五尺幅三尺の舟は五十人にて引くも力及ばざりければ之を放ちけるに忽ち電の如くに馳せ去て岩角に触れ骨破微塵となりにけりなたクロコダイルと名けたる舟は綱の中断したるが爲め五人の乗組員を載せたるまゝ破壊して沈没ぜり滝舟仝の乗りたる舟も此と同じ困厄に遇ひて押流されしも幸に覆没の難を免れぬ此河の最も急湍なるものは其の流れ一時間に三十英里の速力もあらんかと思はるれば最其の飛脚船にても運輸の自由を得さるべし既にして河の咽喉に達しけるに此は河幅二百五十間ばかりあり非常の奔湍にして航通すべきやうなけれど四岸は十丈に餘る断崖にて恰も壁もて囲りたるが如くなれば如何ともすること出來ず大に困じ果てけるが幸ひ此邊の土質は稍々温和なりければ之を屈ひ辛うじて例の引揚げをなし陸上を推挽して漸く通過したれど此れが爲め舟敷を破し殘りし舟太く破損しけるにぞ此處にて滯在し森林に入りて木を伐り倒し之を断ち割りなどして新たに敷設の舟を造れり

舟成りて再び漕ぎ下りけるに六月三日の事なりき一行の中にて無二の士官なるフランクが乗れる舟のマナスアの奔湍を過くる時水夫等は危みて陸を回らんと勧めけれど

も開入れ奥深く狎れて摺抜んとしたりけるに舟は箭を射るよりも疾く沼る〳〵巨湍の方へ押流されぬフランクは上り見るに襲々たる響の中に激せる水の逆捲きて凄じなんど言ふばかりなければ玆に危険を覺りけれども此時は既に晩く其がまゝ蘇地に湍壺の中央へ逆墜しとなるよと見る間に舟は渦卷く水の面をぐり〳〵と廻りけりフランクは大音揚げ

人々聚りて舟舷を捉へよ綱を捕へよ、

と叫びつゝ衣服を脱んとする間もなく舟は人を載せたるまゝ湍底深く捲込まれ忽ち見ねなりけるが少時にして復び下流に浮び出てぬ但見れば八名の水夫ハ舟側を捉へつゝ水上に頭を現はしたれどもフランクのみは捉へし手をや放ちけん其の中に姿の見えぬ一秒時にして激烈なる波濤の間に現れしかば能手なるアリディと云へるが之を救はんと抜手を切て泳ぎ寄り尺寸の處まで進せし折柄怪と音して渦卷き來れる激浪の爲めに捲込み去られ能手ハ辛くも浮みしかどフランクは那處へ行けん影だに留めぬなりにけり、斯る危難に遇ふて命を失ふもの多かりければ一行の人員益々減少し跡に生殘れる者も悉く疲れ果て今は何すべき氣力もなきまで至りしが唯だ蘇丹令が「是れぞ公果河に相違なし最早海口に到るも遠からぬ」と確認したるにて縱に勢つき疲れを忍びて前程を急ぎけり

此邊の土蠻は一体に平和にて猛悪ならざる代りに蘇丹令が齎らせる品物などを珍重せぬニーガンダ其の他の内地

にては昇降機、花布、頭飾りの類ひを除の外に貴びければ同地方にて全隊の食料と交易するに足る程の品物を與ふるも此處にては僅に十人の一食に充るに過ぎざれば、大陸の西岸に近き地にして漆西洋に面せる處には歐洲人の住居する者もあり往來する者もありければ此邊の土人は之と交通貿易をなし居るにぞ略ぼ其の相場を知り開明國の品物なりとて左まで珍しからざるなり左れば整るに進んとせる蘇丹命が物品にては何程どの食料をも買ふ能はざる人々餓を忍び僅かのものを分ち喰ひて辛く其の日を凌ぎけり

蘇丹命は地理に明かなりければ既に公果河の落ち口に近きたるを聞り險路を取りて一日も早く目指す地に進ずるを上計とし斷然舟を捨て陸に上らんと決せしかば舟は皆な乘捨てたりけるが中にも夫のレイディ、アリス号は遙々英國より跨ひ來りて忠實に其役を勤め二年來の今日まで也相親み或はウィンドゥヤ湖を巡航し或はバンガーカを周遊し來たれて主命に背きたることなく中央亞非利加を横斷して七千英里の間追隨せるものなれば捨置き去るに忍びざれと之を運搬するの力なく遺憾限りなくも復た能術のなきまゝにイサンヤラ湖に近き山の嶺きに安置して其の朽ち壞るゝに委しけり時に千八百七十七年七月三十一日なり

此地より海岸に達する路程いと左まで遠からざる今一島の間渡にて安忠を得ることは明あれども山路峻嶮として大小

の岩石路を埋め崎嶇歩行を妨ぐるのみならず此日頃食物に乏しければ人々力脱け氣憊れて尺地を踏むも千里を行くの思ありて歩むと云はんよりは寧ろ脚を曳摺ると云ふこそ適當と思はるゝなれ左れど中途に止まりなば樣介何年待つとても救援の來るべき望もなければ少しづゝなりと歩まんと互に扶け勵まして疲れし足を引て進め土蠻の部落に辿り着き駐を告げて憐れみを乞へども此地方の蠻人は内地に於けるが如く因縁ならぬ代り質朴の風少しもなく狡猾にして薄情なるたけは幾分か文明的に化し居る今一行が斯る困難の狀を見るも爲に一樂乎一投足の勞をさへも執らんとせず如何に助力を懇願するも發煙の眼を廻るほどにも思はず冷かに待過して顧みる者わらざれば蘇丹令も大に胸を痛め斯る有樣にて尚は幾日を經たらんには一行手を束ねて餓死する外なしと種々評議を盡せし末特に三名の從兵を先發として「ムンボマ」に送り救援を求むるに決せり因りて蘇丹令は同地に居留せる歐洲人に救援を懇請せんと事情を具したる書を認して一行の中より先づ幾らか强壯と見ゆる者を選み八月四日を以て發せしめたり此使に選ばれたる從兵も同しく疲勞を極め居れども衆の苦痛を救はんとするの念あれば晝夜の別なく兼程して進みけり

一行は相替らず徐々と歩を運びて同月六日に「バンザ、ムビコー」と云ふ處に行着きたり左れど今は何れも羸頓し眼陷り肉疲せて顔の色蒼ざめ骨露れ見る影もなき容体となり

て村雨蔭なる芝生の上に腰打掛けて休息せしが五に言語を發する氣力さへなく片息吻きてありけれども村人等は樂り來りて之を視るのみ一片のパン半鍋の肉すら與へんとする者もあかりけり一行は此時既に飢極り疲極りて殆ど一歩をも進むること能はゼ惜むべし大功成るに進んとして蛇に矢墜する事かと人々唏涙を呑込みつゝ悄然として死を待つのみなた爲す所を知らざりけり

沿る折から西の方より岡を下り來れる一群の旅隊あり彼れは何ぞと衰へたる頭を擡げて其の模樣に眼を注ぎ近くまゝに熟く視れば其先きに進めるハ救援を乞ふの使者として先發せしめし三名の從兵にて後にハ荷物やうの物を擔へる人夫數名を附跟へり是はエンボマに居留せるソイ

カ、ハリソンと喚ぶ岡個の英商が蘇丹令の書を披見し一面の厭あらざれども其の困難の狀を察して食料其の他の必要品を送り來れるなりけり折る救援の此切迫の際に到着しければ人々天に歡び地に喜び今までは失望の餘り想つことさへ叶はざりし者の死も魔の枕に觸れたるが如く頓に氣力づき雀躍せんぱかりに勇み立ち深く岡英商が義俠を感佩したるぞ有理なれる

此の救援を得て一行は難なくエンボマに着しける蘇丹令は是れにて印度洋より亞西洋まで亞非利加大陸を横過し終りたれば同地より便船に搭して亞西洋地中海を航し安全にザンジバル島に歸着したり今其の手續きは只煩しきのみなるを以て省略し蛇に餘せゼ

千八百七十四年十一月十七日パルカモウを出發したる探

探隊の一行は飄る壯健あるもののみなりしが今や蘇丹合と共に無事家に歸れるは極めて少し去る程に蘇丹合は旅行中艱難に耐へ辛苦を忍びて能く命に從ひたるの勞を慰め一行の者に暇を與へけるが此時永き間の山來事卽ち種々の危險艱苦のさまなどを映想して万感交々胸に浮び悲然別るゝに堪へざるの思ひあり是は日夜辛酸を共にし五に扶けつ扶けられつ兄弟とも主從とも云ふべからざるの厚情となりたればなり

蘇丹合が紀行の末段に云く

ザンジバル船の多くの家に於て幾年の後までも我々の探檢が談柄たるべし而して予に隨行せる者等は其の談話の主人公たれば親屬知友に向ひ得意に之を叙述するなるべし彼等は楽と教育なき者ともなれど正實に其の事を擔當して解忘せざる敵に臨みては精錬せる老兵の如く能く指揮に從ひて進退せり兎に角予が能く暗黑世界の地理に關して三大難問を解釋せるは彼等が忠誠ある心、快敏なる手とに助を得たるに因れり、

蘇丹合が數多の歳月と資財とを費し非常の艱苦を嘗めて収め得たる功績い何ぞや人種學上、動物、植物學上に於て開明したる所大なる多けれとも道は始く合き北の最も著しきものは地理上に在り第一ウィクトリヤ湖を探檢してナイル河の南極を究めたる事、第二ルンガンガ湖を巡航してリーキーガとの關係を明知せる事第三ローラバ河に屬する不可思議を發摘して公果河たることを確定したる事等にして之に因り文明世界の地理に屬する大欽典を補ふことを得たるは實に千歳不磨の勳功と稱すべきなり

第三回　探檢　（白山國の開創）

古より暗黑の中に鎖されて世に知られざりし亞非利加の內部も蘇丹介が探檢の功績に依りて明かとなり五淺大湖の源委また瞭然となりて著く地理上の知識を弘めたるのみか開明人の足跡を絕てる蠻烟深き處に在りて沃野千里に連り貿易に資すべき產物も亦た陸あからさる事なで密に知れ渡りしかば忽ち歐洲人の企業心を喚起して種々の計畫を立つる者あるに至れるが中にも白耳義國に創立せられたる一協會ハ規摸の壯大なること他に肩を比ふる者なし抑も此協會は素と白耳義皇帝の發意に出で國都ブラッセル府に會議を開き中央亞非利加に向ひ貿易の道を開かんとする目的にて其の方案を討議すと聞かければ歐米諸大國よりも亦り會する者太た多く茲に萬國協會と云ふを創設して中央亞非利加の探檢に從事し蠻人を導て開明の大氣を呼吸するの良民とならしひることを決議し乃ち協會の本部をブラッセル府に置きレオポルド帝を推して總裁に戴けり

蘇丹介が公果河の源を渡見したる翌年に及び新設の萬國協會に於ては別に支部を設けて特に此河を利用し愈々實際に手を着くるの運びとなりければ總裁レオポルド帝は大に意を銳くし多くの資財を投じて十分の保護を加へ給へり同會委員が計畫せる重なるものは公果河に沿ひて處々に貿易駐留場を置く事、駐留場近傍の土地を酋長より買取る事、土人を開明の域に導く事の三點なりしが此事に就きレオポルド帝は屢々蘇丹介を面見して其が意見を諮詢

せられけるにも蘇丹合も平素抱懷せる所見を盡くして披陳する所ありしかば爲めに同會が利便を得たる事鮮からざりしとぞ

既にして賞金の事樂も了りけるにも愈々着手すべき協合となり蘇丹合は特に總督皇帝の委托を受け協會の特派委員長となりて亞非利加に赴き此大事業に從ふことゝいなりぬ中央亞非利加を開く事は前二回の探檢中早くも着眼せし所にして蘇丹合が胸中には既に其の方策を畫しありけるが今や之を實際に施行するの機會に遇へり此際蘇丹合がものせる書中に左の一節あり

今度の計畫は同時に三大要件を遂ぐるものなり第一樂眛無智の土蠻を化して人道を弊へしむ是れ仁慈の業なり、第二內地の實測をなし山川の位地、部落の所在を精査する是れ學術的なり、第三土蠻の蔑山するものと開明世界の物品と交易の道を開く是れ商業的なりと云々

幾日ならぬ第三回の探檢として亞非利加に赴くべき諸ろの準備も整ひければ小形汽船アルボアン號に搭して先づザンジバル島に到り此處にて前の役蘇丹合に從ひて忠實なりし島人の外新に六十八名の土人を雇ひ入れけるに島主も大に蘇丹合を尊敬し歓で之を迎へ島獸の肉ども多く贈りて隨行となしたり夫より一行は再び汽船に乘りて引返し地中海を航行してジブラルタルに着しける此地に本合よりの訓令到達しありければ件の訓令を披見せり其の要領は

第一內地の酋長より土地を讓受け道路を拓り耕作を爲すの權利を取得する事、第二處々に駐留(ステーション)搭を設け黑人を

集めて白人之を監督する事第三駐留場に於てハ近傍の部落を支配又は保護する事第四駐留場は各共和社會の中心たるべき事、第五此計畫たる白耳義國の殖民地を作らんが爲めにあらゆる有力なる黒人國を排逐するを以て主眼となす事と云ふに在り

蘇丹介の一行が乘込めるアルボアン號ハジブクジルルを解纜して嘉西洋に出て南方に向ひ亞非利加大陸に沿ひて進航しける程に早くも公果河の海口に達しけり、此河の海に注く處は廣濶幾と三英里に亙り激流奔注の勢ひ激しく幾んと向ひ近くべからざる、其が両岸ハ怪巌奇石峻々として峙ち怜る鑿もて彫刻したるかと疑はる其が上又は樹木蔚鬱として生茂り丘陵の狀屏風を立てたるが如く其の間を流下し來る水は暴溢して岸を齧み宛ら玉の碎けて舞ふに似たり其さまの雄壯なる方ふるに物あらざ、アルボアン號は此急流を遡らんと馬力の續かん限り押張りて進航を勉め今や汽罐の破裂せんかと思はるゝはかりに焚立てたれど動ともすれば押流されんを有様なりしが乘組員の精を勵し運轉したるに由り辛くもバナヽヘブンに到着し其處に錨を投じたるは千八百七十九年八月四日の事なり斯と見るより先發として此地に來り居たる協會の役員等は何れもアルボアン號を訪ひ甲板に於て蘇丹介に面談せり其の人々は米人一名、英人二名、白耳義人五名、丁抹人二名、佛人一名都合十一名なり

一行の用に供せんが爲め此處に來りて碇泊せる汽船四隻あり其は十六馬力六十五尺の鋼鐵船ビルジック號、六馬力四十二尺のエスペランス號、六馬力四十三尺のエンアウア

ント號、六馬力三十尺のローヤル號なり其が中にもローヤル號といへるは形こそ小さけれ此はレオポルド皇帝より今度の樂に就て特に賜りたるものなりければ船体の内部は何れもマホガニイ材もて作り飾れる此麗はしなき船にして尙ほ其の外にも三隻の鯨頭船ありけり

バナヽの海面より望み見れば半島の形をなし山を背にして前面は海に枕めり其が岸近くには赤瓦を葺みて柱となし白土を塗りて壁とせる歐人の商館軒を比べたる中にい器に聳ゆる高樓櫛閑も交り見ゆて自ら一市の体をなし居れり蘇丹令の一行は此處に碇泊すること數旬にして漸く役員の職掌を定め船の進力を撿し其の他必要なる準備を了りければ再び百四十二名の土人を雇入れ總勢二百二十三人、夫々手を分ちて定めの船に乘込み千八百七十九年八月二十一日の拂曉をトし一齊の號令を下すと共に猛しく錨を拔きければ進船器の運動に伴れて徐々と河水を辷れり是れぞ此河に沿ひて殖民の種子を播き後には列國の商賈が制導の權利を以て其の中に出入し乎を携へて黑人と貿易をなし勢傾跡を歛めて法律之に代り殺伐熄で安康來り覺には世界無比なる彼の共立自由の制度を立る基なるにぞ一行が乘れる濠船も除め此の祝意を表せんとにや閃々たる黑煙中天に冲りて勇しく劇なたる濠雷山河に響きて歡ばしげに聞ゆけり

漸く流れを辷るに從ひ河の両岸は西坡となり坡上にハ五樹蒼水蔭立して枝を垂れ其が下には蓋竹蓋荻蓋りて參差水に觸れ風に中りサク〳〵と音するの外は唯だ水流の渦々として奏るあるのみ四面閑寂として死せるが如く睡れ

ろが如く一羽の鳥すら幽邃を破るなし凄怜荒涼の光景人をして神を游し骨を寒からしむるものあり

暫くして一行はポマに着し此地にてニッサンダ部落の酋長に迎ふ是は蘇丹令が前回の探検に於て面識ある者なりければ之を屈ひて嚮導となしけり隨行の漢船アルボアン號は此より報告を齎して歐洲に別れ還ることゝなり一行い進でウィウィに至りけるに左右の斷崖は恰も絶壁の如くにして其の高さ百尺に餘り處々に峙てる危巖は人工を加へて削り成せしに似たり

ウィウィに船を寄せて陸に上り小高き岡に打登りて北邊を見渡しけれども滿目巨石と樹木を以て被はれ駐留の場所ともなすべきい終に四十間四方ばかりの平地あるのみ是とても上面砂礫ならざるいなく背後い森々たる草薮にして高さ一丈五尺にも餘れる雜草の際間もなく生茂れり一行い其處に至り先づ棒薮を研り火を放ちて茅茂を焚き拂ひ砂礫を取除けなどして兎やら凡うやら平地を得てければ此處に家屋を架して根據を据んとしたれども其の前に於て近傍の部落と契約を取結ぶこと必要なり因りて彼の嚮導に屈ひたる酋長デイディを遣はして協議に及ばせけるに其の嚮導に從ひて出來れる酋長五人あり其が中の樟梁株たる者は名をウィウィローンギーと喚て骨格逞しく容貌如何にも獰悪にて人をも取て喰ひかねまじく思いれけるが身に被ける朝衣禮服(ハ)歐洲にて侍僮の着する綿衣にして朋着(ハ)にい靡美なる色のものを用ゐ頭には曲藝者の冠ふるが如き赤白青の三色を打交せたる帽を戴けり其の次はムバンデコーとて頭白の老人なるが是は歩兵の着

する軍衣を着け耳鐶の等飾りをなし腕環をも穿ちたり其の他古びたるフロックコートを着せるあり汚れたるローンクコートを被れるもあれど孰れも相稱なるまで相應はしと思へるはあらざりき

蘇丹令は件の酋長等と會合しけれども初日には重要なる談話をなさず雜談に時を移し酒食など與へて其の歓を買ふ事を勉めしかば彼等は大だ滿足の体にて恭順に貢ひたるジン酒の瓶を携へつゝ酔歩蹣跚として立歸れり翌朝に及びて再度の會合をなし五に押引を爲したる後遂に百六十個あまりの價ある羅紗を酋長に與へたる上一ヶ月十個の地料を拂ひて二英里四方の地を使用することの約成りけり蘇丹令の見る所にては公果黒人の取引に於ける勘辨は彼の慳吝なる猶太人にも劣らざるべしと云へり

偖も一行の人々は地面使用の約成りければ時を移さず建築の工を起し先つ地固めに取掛りけるが土地凸凹にしてしかも礫碩あれば地均しに困難を極めけるも蘇丹令が人夫を督して別ち石を割り土を築し木を研り柱を建つるなど卒先して日々活潑に働きければ衆皆な之に勵されて骨を惜まず働きけり土蠻の蘇丹令が石を割り築の巧なるに驚歎してアクマダ(石割り)の名を負するに至れり斯くて三ヶ月と二十三日を費して第一の駐留場を築造し了れり其の本部は河に臨める小高き岡阜の上に築き其の前面に數棟の小舍を建設け側らには菜園をさへ作りけり此等の土木を爲すには無比の努力を要しけれども蘇丹令が忍耐は何物にか打勝ざるべき遂に見事なる駐留場をば成就しけり蘇丹令は常に部下を戒しめて曰く

職務を守ることは我々の法律なり規程なり之を忘る者は容赦せゞと、

其の能く百鑑を排するもの實に茲にありと云ふべし

既に第一の駐留場落成しければ蘇丹合はスパーカトラと云へるを此に留めて守らしめ更に精鋭なる從兵を選抜してイサンギクに向へり是れ千八百八十一年二月二日なり

此一行は行く〳〵測量をなしつゝ進みけるがウィウィとイサンギクとの間に飛下せる大瀑は到底船もて通航すべくもあらざれば中途より陸に上り河に沿ひて往く程に峻坂を越え峻嶺を攀ぢ、丘陵に過へば茨荊を拔りて進み、暗黑なる深林に入りては餘枝を矯めて過ぐ辭る困難を冒す事十七英里にしてバンサーニサンダに着せしかば此處にても亦た最寄の部落より酋長を招迎へて會議を開きけるに集る者三十名に及び中々の大會なり酋長等は孰れも隣洲人の古着を身に纏ひ今日を晴れと装飾りて出來れり蘇丹合は會議を開くに先ち彼れ等が頭腦を洗濯するに必須の藥劑たる例のジン酒を與へて飲喫せしめけり此の會議の結果として彼れ等へ羅紗、頭飾、針線など取交せ六百五十圓ばかりの品物を得て道路を造り其の地方を開かんことを承諾したり

道路を作るといふは固より容易き業にあらねど殊に荒漠たる亞非利加内地の事なれば崎嶇たる山嶺、窮嶮たる森林突兀たる巖角、險阻なる斷崖、縱横せる小川、之を削り之を斫り之を敉き之を夷げ之を架して始めて貫通せる道を造り得るなれば其の勞苦の關世なるは今更めて説ざるも推測するに餘りあるべし

ニサンダよりは一面に繁茂せる森林なるが此中には野牛又は野牛の群をなして彷徨するあり其の蹄の音は恰も軍隊の列をなして行進するが如き響をなし凄しなんど言ふべくもあらぬ或る時獵丹介は何心なく歩を進むる折から面前四次許りの處へ突と一頭の野牛跳り出でけり流石の獵丹介も餘り卒然の事にして銃に銃を放つ間のありしのみなれば狙ひ外れて彈丸は那方に飛去りけるにぞ野牛は一散ッと叫へ此方を目で進み來る勢ひ當り難ければ人々懸命の聲を揚げて逃立しかば野牛も大く懼れけん間ひ間尺の處まで迫りしかど忽ち横に跳れて奔り去りけり既にしてイサンゲに到る此の部落にても例の如く酋長を會して協議を遂げ他處と同じく價を出して土地を借り駐留協を置くの約を結び了りて直ちに引返し三月十日ウイ

ウイに歸着せり其後七日を經て中央亞非利加の道路第一標を打立けり尖よりハ非常の運力を以て後に通行し得べきたけの道路を造ることに熱心し第一區二十二里に達するものを一月と三日にて竣成せしめけり

成る時土蛮の酋を樂とする者に過へり作の醫師は瓢瓜の中に石卵又ハ小石の類ひを盛りて携へ居けるが其言ふ所を聞くに如何なる難治の病症にても一たび我が手に掛くれば快復せざるはなしと聞き及を誘めかして最と陽說に過べにける其の陽說の狀オッ〳〵隊州の新聞紙に不治の症なしと廣告する寶藥の効能書みきたり此れに依て見る時は公果の黑奴も左まで來開の蠻民にハあらざりけりとて思はず一笑を催うせり

距遠は敢も此頃に富む地にて其の數の彩しきこと言語に

遠せた樹の枝に蟠るあれば草の根に潜めるあり別きてスピッチンケ、スチークといふは黄だ奇異の蛇にして其が怒れるに及べば毒液を吐注ぎて六尺の遠きに達す一たび其の毒液に觸れたらん者は八九日を經るも尚ほ落痛止まを最も怖るべき毒蛇なり

其の後本營をマンギバに移しけるが蘇丹介はウィウィに在る全隊をも移さんとて滊船ローヤル號を陸に揚げて大なる荷車に載せ五十人にて之を挽かせアウアント號は原解きて運搬すること、し其の他の諸荷物は總て車に載せ運ふことに定めしが其の最日五十四頭に及び千八百廿七個に分載するに至れりされば一行の人數にてウィウィ上りマンギバまで幾回となく往復して之を運ぶに百六十日を費し其の往復の里數を延長すれば九百六十里に餘れり

其の勞苦想ふべし

八月九日には先發者バンヂ河に到り林を穿ち萍を変りて進みけり此邊は深林にあらされば曠野にして荒漠極りなければ食料を貰る所なく其の匱乏を憂ふるのみなを全隊の七分一は病に臥して用をなさゝるにぞ蘇丹介は例に依り先發隊を選み自ら之を率ゐ途上に於て測量標を打立てつゝ子スケレッーに赴き物を與へて六十三名の土人を勝ひ道路を造るの援助をなさしめけり

十月二十三日マンギバに在る船荷物をリェンダに移すニゴマ山の麓に於て端なくも佛國の探檢家ブクザアに遇へりブクザアは同僚位に十五人にて各々ウィンチェスタア施條銃を携へゥ斯ばかりの小勢にて深く蠻地に入れるを見て人々其の膽勇に驚けり此一行の逗留二日にしてウ

イウイの方に向ひて立去れり

ニヂマにては河流に急激なる瀬多くして船を行るべくもなく河岸は絶壁にして超なければ通し難し如何はせんと雷時佇立して四邊を點檢せしに巨巖より成れる山角の河中に偶然突出せるも其が岸下の水い甚と淺かり因りて岩を撥き石を拔ち山角に沿ひて埋立てをなし二百間あまりの道路を造りこれより上ること數町の處に登れば水流急ならずして航通に堪ふるにぞ再び船を卸して進行し千八百八十一年二月二十一日を以て全隊イサンヤッに達せり

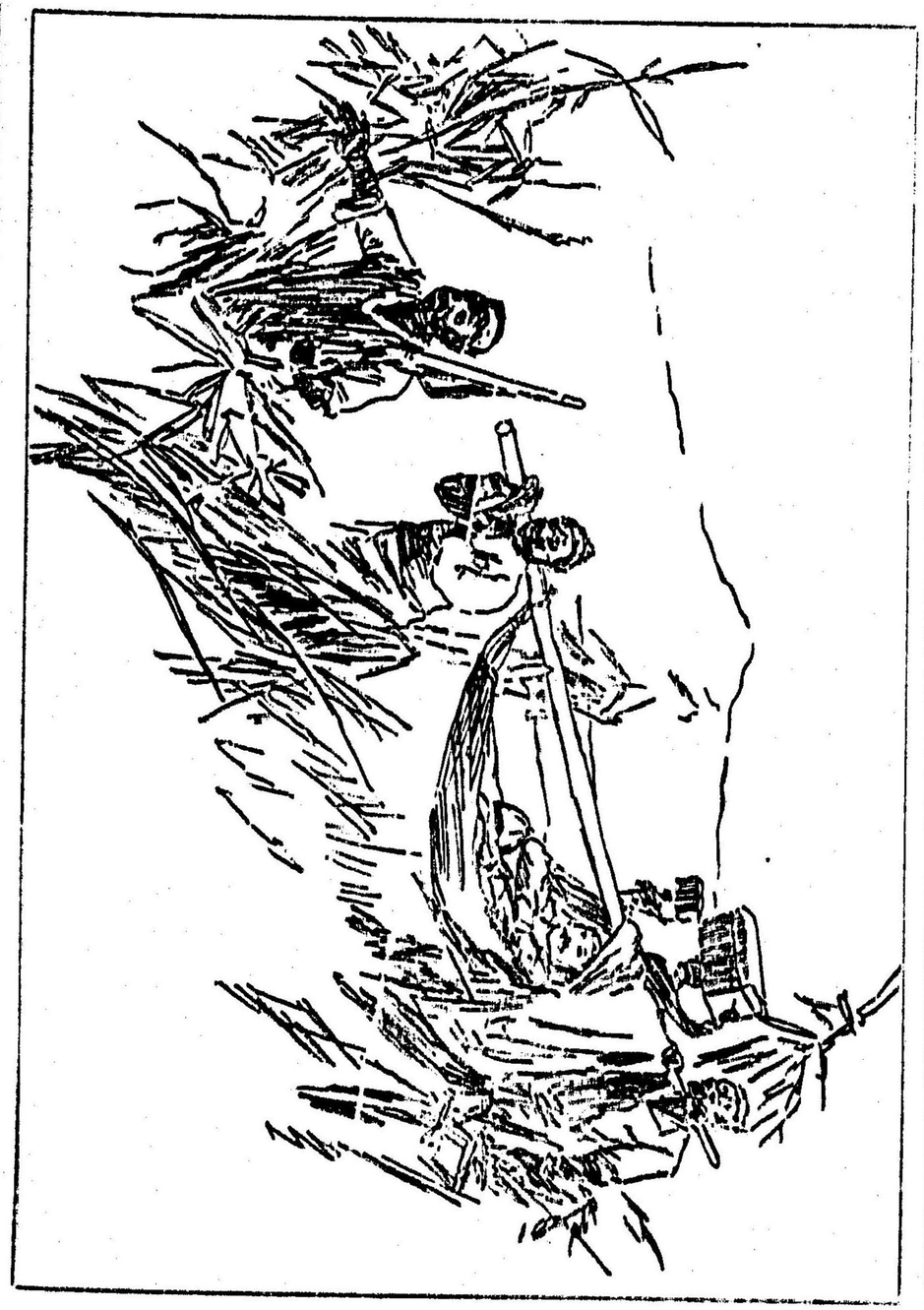
第一測量隊がウィウィを發してより茲に至るまで實に一ケ年の日子を閲せり

尖より先發隊は尚ほ進みて五十英里許りも奥の方へ入り込みけるが困難に困難を累ぬて竟に種々の病を發し死亡する者歐人六人、土人二十三人に及べり左れど白人の缺員は歐洲なる協會本部より派遣し來るに因りて補充するを得たり

イサンヤッよりマンヤンかなて船にて溯りけるに暗車水を撥きて流船溟を破り融々として劇しき磐きを發するにぞ此辺りの水底に棲息して抑る攪擾に慣れざる鯛の其處遊處より現れ出で烟々たる眼を呼り船体整みて追り來れど彼等が鋭き齒も鋼鐵船を破るの力なければ出沒攻撃すること暫時にして止みぬ、船の進むに隨ひ河は益々打開け流勢も稍々緩かになりしかども河底一面の岩石にして處々に暗礁ありければ寸刻も注意を怠ることを得ず両岸には奇巖聳ちて赤土の坡其の間を點綴せり土人の家い遠なる丘陵の上に散見し其が下にい數歩の畑を有し種々の植物

を戦場しつゝあり紙船の河を過ぐるを見るや土人爭ひて河岸に馳出で貿易をなさんと竊めり船を寄せて羅紗、銅飾、火酒等を與へ芭蕉實、玉蜀黍、鶏の類と交易す此邊は食料に供する物品夥しくあれども代價太だ廉なり

ニダメカに着せしに此地の土蠻は喜びて一行を迎へ長途の勞れを慰めんとて青年の男女樂りて舞蹈を催うせり其の踊れるさまゝ就れも唱歌の拍子に從ひ一齊に足を揚げ手を搖りて踊廻果ては手と手と雜きて四体を逸り各々何やら歌ひながら輪の如くに環走す其の廻る度の急なるに從ひ唱歌の音調いよ〳〵高くなり往く折しも中央に肩車に乘れる壯夫ありて小刀を取出し調子に伴れて己が首を刺すこと數回にして淋漓たる鮮血の口中より迸り出て殘忍の狀見るに得堪へず鮮丹令い勢に酔ひて喪心し殘あら



んことを恐れ急に之を制止したり

五月一日遂にマンヤンガに到着す薩丹介は此地に於て熱病に罹り一時は危篤に陥り十四日の間も病床に困臥して起つ能はざりしが今度こそは薩丹介が未曾有の大業も其の功半にして空に廢滅せんを模様の見えければ人々大く憂慮し薩丹介も今は斯うよと思ひ定め最後に驚くべき多量のキニーネを服し幾ど五十グレーンに及べり同月二十日に至りては愈々重体となりけるにて最早や死期も遠からざるべしと感悟し隨行の役員を病床に會して遺命を傳へんとせしに至りしかど天佑は遂に此偉大夫を棄ふを欲せざりけん此頃より漸次愈愈に向ひしが身体の衰弱甚しく幾に骨と皮とを存するのみ兩脚は痛痛りて竹杖の如く變手は脊を搔く際始に似たり六月五日に至り佛人リンダア

といへる者歐洲より援隊を率ゐて到達しければマンヤンが地方の酋長と約し河に枕める丘陵を卜して駐留場を建設せり之を郭三となす此の處に隊人三名土人十八名を留めて守りとなし三ヶ年間支持し得へきの糧食を殘して出發したり

蘇丹令は一行を率ゐてスタンレイ池(後に名く)の方に向ひて進み今回は總勢を二手に分ちて水陸より並び行きけるに此地方は地味沃饒なれば耕作の業十分開け居らざれども食料に供すべきもの甚た多し

コシヤッリーに到るに此地の土人は歇で一行を迎へ各種の物品を出し來りて交易を求めける此部落の酋長は太だ狡猾なる者にて口には「敬愛すべき兄弟よ」など唱へて懇切なる意を表すれども腹の知き腹は疾くも蘇丹令以下の身邊に注ぎやゝ〳〵と見廻して之を貪らんとする慾念を動するものに似たり左れども害を加へて奪はんとするまでには至らざりし此部落に落すると間もなく佛國の國旗を飜しつゝ來れる者に遇へり是れは佛國の酋長にて名をマクローンと稱する由告げたれども全く佛人にはあらぬ件の酋長はペンヤットとイムプリアとの間に於ける地方を酋長マカコーコー及びブクッッより領受けて佛領となせる旨の書を出して示し翌日快を分ちたり

一行は進でマリヤに赴けり此の村には四百人許りの土蠻ありて今しも象牙の貿易をなしつゝ最中なりしが群中より骨格逞しき黒漢出來り蘇丹令の手を握りて物對面の禮を施せり是は此の部の酋長にして名をかマンコーと呼ばる、者なり蘇丹令は酋長に對ひ此の地方に於て佛人と

土地割與の約をなしたる處あるかと問ひけるに一切左ることは知らぬと答へ且つ何時にても森丹介へ此地に殖民をなすべきの權利を與ふる約を結ぶべしと云へり然るに茲に意外の障碍こそ起りけるなれ彼の佛國曹長と稱する哲人は好で黑人の小兒を取喰ふとの流言を放ちけれは無智の蠻人等は之を聞て何餘驚き慌てざらん忽ち奇怪なる聲を發ち那方這方に群れ集ひて會議を開きけるが天明くる頃に至りて一行の休息せる幕の外には斧を揮ひ刀戟を提ぐる者滿列せり森丹介は此氣勢を見て事端を發せんことを恐れ乎早く此の地を引拂ひて歸路に就きけり左れど件の流言は行く先々に傳播したりと見ゐ到る處の村落にて動もすれば敵意を現わさんとするの色あり爲めに進

行を妨げられしが幸にも森丹介と面識ある酋長ハガリマと云へるが近傍に來合せ居るに遇ひければ之に多くの物を與へて他意なき旨を說明せしより漸く事情を會得し去りて他の酋長を勸解し數名を將て來りしかば彼の駐留場設置の事を謀りけるに彼等は別に會議を開きて何か頻りに相談したれども急に決定すべき樣子の見ゐねば森丹介の彼等に熟考の時間を與へん爲めスージイ(故李佛克斯頭の從者)とザンジハル人十名とを留置きユバガンベンデイに赴き此より使を遣はして本隊を招きけるに其が到着の時スージイも歸り來りて酋長等は彼の象牙商の言に從はされば取引を絕つべしと云へる問答に畏れ遂に白哲人と交を絕つべきに決したりとの旨を告げたり

夫より一行はコーザンジイに行きて營を下せり時に十一

月七日なりスタンレイ池とキントンヒィとの間に在る地方の大酋長マカコーコーと云べるもの來りて謁を取る此は年老いて躰驅痩削せる男なるが其の身は六尺に餘りて身材より長きこと一尺に及び垂れて地を曳けり會議の後土地割與の約を結びキンダローに駐留塞を設くることをも承諾したり蘇丹令は家に留守せる貴夫人へとて數匹の華麗なる羅紗、花布の類を贈りければ欣々として喜色面に溢れ幾度か謝辭を陳へて歸去りける未だ幾くならぬ此酋長マカコーコーより使者來りて疑地の協議をなして成らざりしニガリェマが今は吾心を抱き此夜來り侵すべき旨を告げたるにぞ蘇丹令は時刻を測り從兵に命じ側なる數又は荷車の間に身を隠して企圖を待しめ靜り返てありけるにニガリェマの獲物々々を携へたる土蠻二百名許りを從へ鼓を打ち角を吹きつゝ襲ひ來り蘇丹令が寂閑なるを見て傍る心生じければ何の備へもなさを間近き處まで押寄せてフト天幕の外に吊るしある支那製の大鐘に眼を着けたり蘇丹令は茲ぞと件の鐘を指さして

是れは魔なり、

と告げたれど彼れい信する容子なきにぞ更に

若し之を打てば忽ち邪兵現れ出ん、

と云へり是に於て彼は益々奇を好むの心を動かし

打て〳〵、

と叫ぶ聲のまだ終らぬに蘇丹令は撞木押取りガン〳〵と打鳴しける程こそあれ隊中より伏兵一時に起り立ち騒ぎと揚げたる鯨波の聲諸共に四方より併

々と押取囲み餘さじものをと採立てけり昭ひ來りし土蠻等は事の意外に魂を奪はれ取ふべき擬勢もなく右往左往に潰走せしかばニガリニマは逃げ後れて途を失ひ神消ね倒れ伏して手足の措く所を知らを蘇丹命が背後に隠れて只管ら助命を請ひければ蘇丹命は之を捉へ厳しく後來を戒しめて其の儘放ちおらしめけり

既にしてキンガニーに進しければ地利を選みて駐留場を建設せり此場は公栄河の上なる丘陵の中腹に位し要害太た堅固なり是は新にレオポルド帝の名に因みてレオポルドヴィルと名く此の處より上流五百英里の間に汽船の航通を爲すを得べし

此地方は中央亞非利加中の最東部にして猶目緑草青々たる中に珍奇佳草の彩るありて宛ら雅麗なる錦毬を延べたるが如く地味沃饒の平原少くも五萬エーカルに下らを然れども此邊の村落に接居せる土蠻は孰れも怠惰にして耕作などする者なく終日安坐して雑談するを好めば斯る沃土に住みながら常に食料の缺乏を告くるは最も惜むべき事なり此地方には通貨あり所い他にあらを細き其論の梅にして之を交易の資とはなせり

駐留場建築の事了りければ伺は上流に溯りて探検せんとアウアント號を御して水に放ち外に二隻の小舟を浮べ蘇丹命は白人四名土人四十九名を率ひて進航しスタンレイ池に臨る此の池の潤さは二百五十方英里あり池の南岸に沿ひて進みバニュ島に船を寄せけるに此島には野象、野牛の棲む事頗る多し

ムスンゴに着し此處にて酋長ガンデレイと會して談判を

遂げたる來歸地の承諾を得たれば此に駐留場を設くるの計畫を立て役員ジヤンセンを留めて準備をなさしめ一行は進でヤヲ河に入りけるに圖らもレオポルド湖を發見したり夫より船首を轉じて歸路に就きけり途上に於て蘇丹合は復び熱病に罹り今回も病勢輕からざりしも兎角してレオポルドヴィル駐留場に達しけり此時早くも發程後三ヶ年を經たるにゾンジバル島人の雇期既に滿限となりたれば蘇丹合は仆の島人等と共にウイヴィの駐留場に立歸れり此處にて蘇丹合が病氣又は其の他の事故ある時代りて司令權を拳るべきローズセイといへる人の來り戻れるに過へり蘇丹合は如何にも身体衰弱して事に從ふの氣力なきよりローズセイに必要なる報告及び注意を與へなどして後事を付し置き一と先づ歸國の途に登りレオンダに暫時滯留して病を養ひ遂に無事歐洲に歸着したるは千八百八十二年十月なり

初め萬國協合より發したる訓令には內地に三ヶ處の駐留場を設け一隻の汽船を公果河の上流に浮べて海岸との通路を開き聯絡を保つ事とありしに今や蘇丹合は十餘名の歐人と六十八名のゾンジバル人とを率ひて五個所の駐留場を設置し公果河の上流には一隻の汽船と一隻の軽船とを浮べウィヴィとイサンヤ及びマンヤンガとスタンレイ池との間には荷車を通すべき程の道路を造り海岸との通信は四百四十英里の間卽ち公果河とヤヲ河と合流する處にまで保たるゝことを報告し得たり

蘇丹合は歐洲に立歸り氣力稍々回復しければ永く留まるの念なく僅に數旬の滯在にて再び公果に向ひて出發し其

の年の十二月三十日を以てウィウィなる駐留場に着しけるに其不在の間は暫時なりしも百事混乱して全く秩序を失ひ彼の司令長たる獨人は一ヶ月以前に、那處へか立去りて行方すら分明ならぬレオポルドウィルの駐留場も司令長は海岸の方へ旅行し留守長はクヤンヤクの長と共に疾く歸國したりとの事にて到る處放縱に流れ何處より手を着けて整理すべきやと惑ふばかりの有様なりき左れど蘇丹今は多々益々辨するの健腕を揮ひ先づ下流の駐留場に於て秩序を回復し翌年の三月に及びてレオポルドウィルに至りしに留守者の捻東あき爲め近傍の土人と隙を生じ今にも交戰せんとする折柄なれば蘇丹今の第一に此不和を除き交際を挽回せんと非常に苦心し漸く和解するを得たり其の後間もなく暗洲なる協會本部より更に十餘名の役員が二百二十五名の土人を率ゐて來援したりければ新沈にスタンレーウィル、ブランシュウン、キンピイの三處に駐留場を增設せりレオポルトウィル駐留場も亦た規律嚴に復したれば蘇丹今は八十名より成立てる探檢隊を率ゐ夥多の貨物を携帶して彼のアウアンド號其の他の舟に打乘り上流に溯たり

ムスリッに到り暫時錨を投しけるに此處は中々繁榮の部落なり夫よりマンナコーを過ぐるに甘藷を絞ぼりてビールを製造しつゝあり更にボッボーに到るに此邊へ一帶の綠野にして滿眼の曠原は茫々として幾百萬坪なるかを知らぬ迄に至り始めて二百五十英里の間、山澤荊棘を衝きて深く進入したるの價値あるを覺ゆ蓋し歐人をして此の地を利用せしめば忽ちにして非常なる利益を收むるや必然

なればなり

此地方は土蠻の人口稍々繁くボロボー近傍に住居するもの一萬に下らざる因りて此地の酋長と計り駐留場を取敢くる事とせり、夫より二日を經てリコレッに達し土蠻に對して食料の交易を望みけれども初は「痘瘡流行しつゝあり」「食物値少なり」など言ひて謝絶し需に應せざりしが後にハ一行の懇切なるを見て親愛の心や起りけん鶏、山羊其の他の食用品を持來りて盛に取引を爲すに至れり酋長マンゼンボーハ此の体を見て大に滿足し蘇丹令と共に腕を刺して血を交換し例の兄弟たる盟を成せり、土蠻等は漢船を初めて見たるなれバ驚き異しむ事大方ならざり喧車が水を横きて自ら進行するは何に因るかを發見し得ざる或は船底に人ありて之を動かすなりと云ひ或ハ終日火を焚ける釜の中に設置ありて活動するならんなど人に依りて其の推測を異にし臆說區々なるも可笑しかりき

エーレンディ河即ち黑河を測りてバキティに到り此處より公果河に引還し沿岸の酋長を招きて談判を開きけるに孰れも異議なく土地を讓るべき旨を傾諾しければ愛に亦、道駐留場と云ふを設け大尉ウァグールをして二十六名の衛兵と共に之を守らしむる事とせり斯く諸般の準備も殘りなく行屆きければ蘇丹令は流れを下りてレオポルドヴィルに歸着し上下の各駐留場へ糧食を送り守兵を增す等の手當をなしける後未だ三週間を出でざるに飛報ボロボーより來り同地の駐留場は土蠻の爲め焚燬せられたる旨を告げたればスハとて時を移さず時代の兵を進めけるに漢船のマンカに達する今、土蠻は此處に待受けて進へ拒ち

ければ銃を發して應戰したれ共一擊して之を破る能はざるにゼレオポルドヴィルに備へあるゲルップ砲を取寄せて彼等が荒膽を拉がんとせしに其の砲の到れる時には既に和睦成りて戰を收めたるの後なりき左れど一たび其の猛威を示し置くは後日の兇暴を防ぐに必要なりと思ひければ土蠻に對ひて之が使用法及び効能を說明しけれど彼等は之を信じせず單に空洞なる金棒に過ぎずとして之を一笑に付し去れり因りて多くの土蠻を集め河水を盥でゲルップ砲を發射しければ左しもに疑ひ深き蠻人も其の音響きの猛烈なると其彈力の劇甚なるとを目前に見聞し衆皆な耳を掩ひ目を瞑りて魂を消さぬことなかりけり

此の地方の蠻族はウァィヤンゼィ部に屬し其の狂暴なること他に比類なく信仰に關する迷妄も亦た甚しきものあり、極めて細微なる事端に因りて戰を交ふるは常にして珍しからぬ時ありては思慮が人を殺すの原因となりて屠殺殘虐至らざるなく鬨を衆に及ぼすこと往々あり、情失死する時は跡に殘れる情郷を縊殺して殉せしめ、酋長の死せる場合には其が墳墓の上に於て五六名若くは數十名の殉死をなさしむ蓋し殉死の習慣は此近傍一般に行はるゝものにして其の仕方い先づ殉死者を墓上に列坐せしめ側の樹に結び垂らせる繩もて其の頸を絞り劍子背後より斬りて其の首を斷つなり

蘇丹令は此の序を以て蒸船を上流に溯らせリコレクに至りて此處にも駐留場を創立せり此場は六十尺乃至百五十尺の喬木より成れる林に隣れる處に位す尖より赤道駐地場を廻顧しけるに益々繁茂に赴くべき狀ありければ次に